



アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳 注(9)

真下, 裕之(監修・訳注)

二宮, 文子(訳注)

和田, 郁子(訳注)

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 48:107-145

(Issue Date)

2021

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012690>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012690>



アブル・ファズル著 『アーイーニ・アクバリー』 訳注(9)

真下 裕之 監修
二宮 文子*、真下 裕之、和田 郁子** 訳注

<AA: I, 115>

また世界の主たる御方¹は見識の豊かさ²によって、書籍の館 (kitab-ḥānah) をいくつかに分けて、一部を至聖の後宮 (maškū) の中に、一部をその外に置くようになされた³。そしてそのいずれも細分して、つねに分野ごと、および書物ごとの価値に応じて等級づけなされた。書物は、韻文と散文の相違および、ヒンド語、ペルシア語、ユーナーン語、カシュミール語、アラブ語【という言葉

* 青山学院大学文学部准教授

** 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授

1 底本は gīti-ḥudāwand とするが [AA: I, 115]、写本のテキストはいずれも gīti-ḥudā となっている [AA Ms. A: 49r; AA Ms. B: 54r; AA Ms. C: 43r]。 (M)

2 底本は az nūr-i āgahī 「見識の光により」とするが [AA: I, 115; AA Ms. B: 54r]、Mss. A, C のテキストである az wufūr-i āgahī を採った。 (M)

3 ムガル帝国宮廷の書院の配置や編成については十分な情報がなく、数少ない従来研究 [Abdul Aziz 1967] の知見も限られている。それゆえ後宮にも蔵書の一部が配架されている旨のこの記事を確実に解釈することは難しい。ただ Šāh Ḡahān が就寝前に、Zafar Nāmah や Bābur Nāmah など歴史書の朗読を聴くことが習慣であったことは、後宮に蔵書が配置されていたことの一端を説明するかもしれない [BNL: I, 153; Ali 1980: 61]。帝国君主のこの習慣が Ḡahāngīr においても同様であったことは、その当時宮廷に滞在していたイエズス会の対ムガル帝国第3次宣教団のメンバー (J. Xavier ないしは Pinheiro) が記録した見聞記からも確認できる [Tratado: 94, 135]。 (M)

語】の相違によって整理された⁴。

書籍は次のようにして天覧にかけられることになっている。見識ある心を備えた業務の通曉者たちが日毎に書籍を帝王の御聴聞の場に届け、陛下はいずれの書籍をも、最初から最後までお聴きになる⁵。そしてその日に達した場所ごとに、その【聴取した葉の】数を示す標示を、雄弁な御親筆で描き込まれる。葉の枚数に応じて、朗読者には金や銀の現金が恵与されることになっているのである。

著名な書籍で、帝王の御会所⁶において言及されないものは稀である。また昔の物語や諸学の達見や英知の奇聞の数々のうち、公正を旨とする知識探求者の筆頭たるこの御方の御記憶にないものはいずれであれ、飽きることなく繰り返し、多大なる意欲をもって御聴きになるのである⁷。『ナースィル倫理学』(*Ahlāq-i*

4 ここに挙がった五つの言語はもちろん、Akbar 宮廷の書院に集積された典籍の言語の全てではなく、漠然と「世界のあらゆる言語」という意味を含んで記されたものと解するべきであろう。ここに列挙されないテュルク語の書籍は本書に後出するとおりであるし、1595 年すなわち本書の成立とはほぼ同じ頃、ラホールに到着した対ムガル帝国第3次宣教師団は、君主の書庫に、多言語聖書（いわゆるプランティン・ポリグロット）や、トマス・アクィナス『神学大全』、『イエズス会会憲』、『靈操』のほか、『アルブケケ注解』やアルヴァレス『ラテン文典』といったラテン語、ポルトガル語の書籍が蔵されていたことを伝えている [DE: XVII, 63, 76-77; MacLagan 1932: 191-192; Camps 1957: 163; Carvalho 2012: 28; 真下 2020: 261]。(M)

5 Akbar は文字を解さなかったが、本文のごとく、典籍の享受を聴取によっていた君主は Akbar だけではない。注3のとおり Šāh Ġahān も朗読の聴取を習いとしたが、この君主は「陛下が気に入ったものは、繰り返し聴いて、暗記して、御前に控える近臣たちに語って聴かせる」という具合であったという [BNQ: 417v]。また後出の注7のとおり、王子の修養のための「読書」も聴取によっていた [IAF: 66-67]。(M)

6 底本は *maḥfil-i humāyūn* とするが [AA: I, 115]、写本のテキストはいずれも *humāyūn maḥfil* となっている [AA Ms. A: 49r; AA Ms. B: 54r; AA Ms. C: 43v]。(M)

7 以下に続く書籍の一覧は、Abū al-Faḍl が王子 Dāniyāl に宛てた書簡（年代不明）の中で、自らの修養のために「聴く」よう進言した書物の一覧と大部分重なっている [IAF: 82]。君主や王子が身につけるべき教養の一部として、いかなる書物がムガル帝国宮廷で重視されたかを知るうえで、重要な情報である。以下に IAF の一覧にみえる書名を示す。Šāh Nāmāh, Zafar Nāmāh, Wāqī'āt-i Bāburī, Kalilah wa Dimnah, Ahlāq-i Nāṣirī, Ahlāq-i Ġalālī および Kimīyā-yi Sa'ādāt の後半。さらに Maṭnawī-i Mawlawī-i Ma'nawī, Ḥadiqat, Ġām-i Ġām。なお Šāh Ġahān 時代に書記官として活動した Čandar Bhān Brahman が自らの息子に宛てた忠告の中で、良き書記官になるための修養として、ペルシア語典籍の講読を挙げている。帝国の王子と書記官の子弟とは「リーディングリスト」が異なるのは当然ではあるが、それでも両者の間に重なる部分があることにも注意しておきたい。そこではまず「ことばを開く」ために *Gulistān*, *Būstān* そして *Ġāmī* の「書簡集」*Ruq'āt* の閲読が指示されている。ある程度学習が進んだら「倫理学」*ahlāq* の書物た

Nāširi)⁸、『幸福の錬金術』(*Kūmiyā-yi Sa'ādat*)⁹、『カーブースの書』(*Qābūs Nāmāh*)¹⁰、『シャラフ・マネーリー書簡集』(*Maktūbāt-i Šaraf-i Manērī*)¹¹、『薔薇

たとえば *Ahlāq-i Nāširi* や *Ahlāq-i Ġalālī*、そして「古くからの歴史書」たとえば *Ḥabīb al-Siyar*, *Rawḍat al-Šafā*, *Rawḍat al-Salāṭīn*, *Tārīḥ-i Guzīdah*, *Tārīḥ-i Ṭabarī*, *Ẓafar Nāmāh* の閲読に進むべしとされる。さらに「昔の」詩人たちおよび「最近の」詩人たちの「詩集やマスナヴィー」の閲読が推奨され、各々の詩人たちの名前が、前者については55名、後者については73名が列挙されている [ChCh: 176-177]。ここではそれらの名前の列挙は省くが、本書および上記 IAF で言及されるペルシア語詩人たちの名前はそこにすべて網羅されていることは確認しておく。*Ġandar Bhān* に焦点を当てた专著は [Kinra 2015]。なお *Ġandar Bhān* のこの記述は *Alam* と *Subrahmanyam* の共著論文において引証されているが、ウルドゥー語の二次文献からの孫引きに留まっているため、詩人名の列挙がペルシア語の原文と齟齬を来している [Alam & Subrahmanyam 2004: 62-63; do. 2011: 188-189; do. 2012: 315-317]。また1688年に執筆された *Ḥulāṣat al-Makātīb* なる書物には、ペルシア語による学習の分野と各々の参考書が列挙されているという。文字と簡単な読み書きを習得した後、*Sa'dī* の *Gulistān* および *Būstān* の学習に進むべしとしたうえで、「散文と作文」「詩」「物語」「歴史」「倫理学」の各分野にわたる推薦書の一覧が示される。興味深い内容だが、当の資料の来歴に不明な点が残るので、ここでは詳述を避けておく。この書物についての記述は [Sufi 1941: 76-78] であり、これからの孫引きによる議論は [Syed 2012]。(M)

- 8 *Našir al-Dīn al-Ṭūsī* (1201-1274) による倫理学、家政、政治に関するペルシア語の指南書。*Qūhīstān* 地方の総督 *Muḥtaṣam Našir al-Dīn* の保護下で1235年にこの書を著した(書名はこのパトロンの名にちなむ) [Daiber & Ragep EI2: al-Ṭūsī, Našir al-Dīn; Wickens EI2: Aqlāq-i Nāšeri]。同書がムガル帝国宮廷に普及していたことは、*Abū al-Faḍl* がそのインシャー集で言及するとおりである [IAF: 82, 129]。(M)
- 9 *Abū Ḥamid Muḥammad al-Gazālī* (1058-1111) による晩年のスーフィズム著作『宗教諸学の再興』*Iḥyā' 'Ulūm al-Dīn* のペルシア語縮約 [Watt EI2: al-Ghazālī]。*Abū al-Faḍl* は、1587/8年にラホールで同書に対する注記を執筆しており、王子 *Dāniyāl* への推薦書の一つに挙げている [IAF: 82, 239-240]。同書が *Iḥyā' 'Ulūm al-Dīn* とともに南アジアのムスリム知識人に普及していたことは *Badā'uni* による *Miyān 'Abd Allāh Niyāzī Sirhindī* の伝からうかがえる [MT: III, 45-46]。さらに *Awrangzib* の学徳を示す公式年代記の叙述の中で、この君主が閲読していた宗教関係の書物として、同書が *Iḥyā' 'Ulūm al-Dīn* とともに挙げられている [AlmN: 1091]。(M)
- 10 ギャール朝君主 *Kay Kā'ūs b. Iskandar* b. *Qābūs* (1021/2 ごろ-1087 ごろ) により、1082/3年に書かれたペルシア語の君主鑑 [Bosworth EI2: *Kay Kā'ūs b. Iskandar*; Marlow EI3: *Kay Kā'ūs b. Iskandar*]。(M)
- 11 *Šayḥ Šaraf al-Dīn Manērī* については [AA (Jtr.) (3) : 129-130, n. 46]。*Abū al-Faḍl* は *Maktūbāt-i Šayḥ Šaraf al-Dīn Manērī* の抄録を執筆しているし [IAF: 187-189]、*Šaraf al-Dīn* の別の著作 *Šarḥ-i Ādāb al-Murīdīn* の跋文も執筆している [IAF: 179-180]。さらに *Awrangzib* が嗜んだ書物の一つとして *Maktūbāt* が挙がっている [MAI: 532] ことも考慮すると、*Šaraf al-Dīn* の著作は時代を通じてムガル帝国の宮廷で読まれた書目であると判断できる。ただし同人の書簡集は複数知られており、本書における *Maktūbāt* がそのいずれにあたるのかは定かでない。*Abū al-Faḍl* 自身は *Akbar Nāmāh* において、同人の書簡集として百五十通を集録したもの、百通のもの、二十五通のものの都合三点があると伝えている

園』(*Gulistān*)¹²、『【真理の】園』(*Ḥadiqah*)¹³、『精神的マスナヴィー』(*Maṭnawī-i Ma'nawī*)¹⁴、『ジャムの酒杯』(*Ġām-i Ġām*)¹⁵、『果樹園』(*Būstān*)¹⁶、『王書』(*Šāh*

[AN: III, 95]。このうち『百通書簡集』*Maktūbāt-i Šadī*のテキストを'Abd al-Qādir Bad'ā'uni がその著 *Nağāt al-Rašīd* に引用していることについては [Ninomiya 2006: 346]。(M)

- 12 Abū 'Abd Allāh Mušarrif al-Dīn Sa'dī (1292年没) によるペルシア語の教訓文学 [Davis EI2: Sa'dī]。後出の教訓詩 *Būstān* とともに、南アジアにも広く普及した。スール朝の創設者 Šīr Šāh が若い頃、ジャウンブルのマドラサで学んだのはこの二つの書物であったという [TSS: 14]。また *Ṭabaqāt-i Akbarī* が紹介するイスラーム改宗譚では、あるヒンドゥー教徒が *Gulistān* を読んだとき (つまり彼はすでにペルシア語を解していた)、そこに登場する預言者 Muhammad に関心を抱いたことがきっかけになっている [TA: II, 474]。この二つの例を見ると、南アジアのムスリム社会で、この教訓文学がムスリムの成長や覚醒の表象をまとった可能性は、検討に値するかもしれない。なお両作品が Akbar 時代以降のムガル帝国宮廷において人気作であったことは、歴代君主の署名などを備えた多数の写本が伝世したことからうかがえる。Seyller の網羅的な調査によれば、少なくとも Akbar 時代以降、君主の書庫に蔵された経歴のある写本は、*Gulistān* が 6 点 [Seyller 1997: 286-287; 287-288; 298; 303-304; 312-313; 331]、*Būstān* が 4 点 [Seyller 1997: 281, 336, 338, 339] 確認できる。(M)

- 13 Mağdūd b. Ādam Sanā'ī によるペルシア語の詩作品 *Ḥadiqat al-Ḥaqīqat wa Šarī'at al-Ṭariqat*。著者 Sanā'ī の生没年については確証がないが、de Bruijn によれば生年は 1087 年ごろ、没年は 1130 年頃とするのが妥当という。いずれにせよ同書がガズナ朝君主 Bahrām Šāh (在位 1117-1157) に献呈されたことは確実である [de Bruijn EI2: Sanā'ī; de Bruijn EI: Sanā'ī; de Bruijn EI: *Ḥadiqat al-Ḥaqīqa wa Šarī'at al-Ṭariqa*]。Abū al-Faḍl は同書の要約に対する跋文を 1591 年にラホールで書いているし [IAF: 247]、それに先立つ 1590 年初頭までにこの詩人の詩集 *Dīwān* にも取り組んでいた [IAF: 244]。南アジアにおいて Sanā'ī の作品はムガル帝国以前から人気を博しており、いわゆる「奴隸王朝」君主 Ġiyāṭ al-Dīn Balaban の王子 Muḥammad Sultān が営んだ文芸サロン (mağlis) では『王書』、Ḥāqānī の詩集、Nizāmī の「五部作」が詠唱されていたとの記録がある [TFSB: 66-67]。このサロンに参加していた Amīr Ḥusraw も、自らの詩論の中で Sanā'ī に言及している (本書のこの箇所が登場する作品の著者については他に Anwarī と Ḥāqānī として Nizāmī にも言及している) [DGhK: 36, 38, 41]、彼と同時代に生きたデリーのスーフィー Nizām al-Dīn Awliyā' の行伝 (14 世紀) には Sanā'ī の頌詩 (カスィーダ) が引用されている [SA: 6-12]。(M)

- 14 Ġalāl al-Dīn Rūmī (1207-1273) によるペルシア語の神秘主義叙事詩。Abū al-Faḍl は 1592 年 11 月、同書の縮約版の作成に取り組んでいるし [IAF: 272]、上述の注 7 に述べたごとく、王子 Dāniyāl が「聴く」べき書物の一つとして同書を挙げている [IAF: 82]。また同じ時代に活動したハディース学者 'Abd al-Ḥaqq Dihlawī も同書の縮約版 2300 句分を作成していたことが記録に残る [Husain 1926: 54]。かような記録は同書が南アジアにおいても重要なペルシア語古典籍であったことの証拠である。(M)

- 15 Awhādī (1281/2 ごろ-1337/8) によるペルシア語の教訓詩であり、イル・ハーン朝君主 Abū Sa'īd (在位 1316-1335) 時代の宰相 Ġiyāṭ al-Dīn Muḥammad に献呈された [Meredith-Owens EI2: Awhādī]。Abū al-Faḍl の父 Šayḥ Mubārak が長子 Fayḍī に宛てた書簡の中で同書に言及している [MAf: II, 826]。(M)

- 16 Sa'dī のこの作品については、注 12 参照。(M)

Nāmah)¹⁷、シャイフ・ニザーミーの「五部作」(*Ḥamsah-i Šayḥ Nizāmī*)¹⁸、フスラ

17 Firdawsī (940/1-1020) (生没年については異説あり) によるペルシア語の叙事詩 [Huart & Massé EI2: Firdawsī; Feuillebois EI3: Firdawsī, Abū l-Qāsim, and the Shāhnāma;]。いわゆる「奴隸王朝」君主 Ġiyāt al-Dīn Balabān の王子 Muḥammad Sulṭān が営んだ文芸サロンで同書が読まれていたことについては注13のとおり。ムガル帝国宮廷においても同様であり、Akbar の下命により同書が『ハムザ物語』*Qisṣah-i Amīr Ḥamzah* (注79) と並行して、豪華な挿絵付き写本が製作されたとの記録がある [MT: II, 320]。Bābur 以降、歴代君主の蔵書として伝世した Royal Asiatic Society 所蔵の同書の写本 [Seyller 1997: 336] についての专著は [Brend & Morton: 2010]。ただし同書が詩文学ではなく、歴史書として読まれたことには注意を要する。実際、本書は Akbar の下命により散文版が作成され、その内容は治世末期に編纂が始まった普遍史 *Rawḍat al-Tāhirin* において、古代ペルシア史の材料として利用された [MT: II, 404; III, 206; RT: 15v]。この散文版を作成した Taqī Šūstari は後に Ġahāngīr から Mu'arriḥ Ḥān (「史家のハーン」) の号を授与され、君主の回想録では歴史学に通じた人物として紹介されている [JN (T) : 83; JN (A) : 69; MR: III, 679-686]。また注7で挙げた *Ḥulāṣat al-Makātīb* において推薦された書物の一つとして例示された *Šāh Nāmah* は、Yazdī の *Zafar Nāmah* や Abū al-Faḍl の *Akbar Nāmah*、そして *Mahābhārata* ペルシア語訳などとともに、「歴史書」の分類に属している [Sufi 1941: 78]。ムガル帝国時代における *Šāh Nāmah* の享受や写本の製作に関しては [Sharma 2016] 参照。(M)

18 Nizāmī Ganḡawī (1141/46?-1180/1217?) (生没年については諸説あり) によるペルシア語の叙事詩五作品 (*Maḥzan al-Asrār, Ḥusraw wa Šīrīn, Laylā wa Maḡnūn, Haft Paykar, Iskandar Nāmah*) の総称であり、*Panḡ Ganḡ* 「五宝庫」との異称もある [Chelkowski EI2: Nizāmī Ganḡawī]。いわゆる「奴隸王朝」君主 Ġiyāt al-Dīn Balabān の王子 Muḥammad Sulṭān が営んだ文芸サロンで同書が読まれていたことについては注13のとおり。このサロンに参加していた Amīr Ḥusraw は自らの詩論の中で、自身のマスナウィーとガザルに影響を与えた源泉として、Nizāmī と Sa'dī を挙げている [DGhK: 41]。南アジアのペルシア語著作家たちに及んだ本書の影響を示す事例としては、14世紀半ば、*Šāh Nāmah* と同じ韻律による韻文のインド・イスラーム総合史 *Futūḥ al-Salāṭīn* を著した 'Iṣāmī の例もある。その史書の序文で 'Iṣāmī は、Nizāmī が自らの夢に現れたことをきっかけに「五部作」を精読したという逸話を明かしている [FS: 17-20]。ムガル帝国時代において「五部作」の影響を顕著に受けた事例としては Abū al-Faḍl の兄 Fayḍī が同書に倣って計画した「五部作」を挙げられる [AN: III, 661-662]。本書で後出する *Nal Daman* はその一部である。Fayḍī およびその「五部作」について簡単には [AA (Jtr.) (2) : 81-82, n. 21] を見よ。かくのごとくムガル帝国時代に同書が盛んに読まれたことは、帝国宮廷の書庫を経て伝世した多数の写本の存在が裏付けており、Akbar 時代の書庫に蔵されていたものに限っても数多い。詳しくは [Seyller 1997: 291-292, 306, 339, 340, 342] を見よ。(M)

ウの全集 (*Kulliyāt-i Ḥusraw*)¹⁹、マウラーナー・ジャーミー【の全集】²⁰、ハーカー

19 本文は *kulliyāt-i Ḥusraw wa Mawlānā Ḡāmi* とあり、著作家二人のそれぞれの「全集」(*kulliyāt*) を意味している。フスラウ Ḥusraw とはデリー・スルターン朝時代に活動した著名なペルシア語詩人 Naṣīr al-Dīn Abū al-Ḥasan Amīr Ḥusraw Dihlawī (1253-1325) のことである [AA (Jtr.) (5) : 69, n. 88]。ここでいう「全集」がこの詩人の著作のいずれをカバーしていたのか、さらには「全集」の定形が存在したのか否か、確たる知見はない。15世紀から16世紀に属する古写本の内容をカタログによって検討すると、収録作品や配列はおおよそ一致する点で、「全集」の典型が存在した可能性をうかがわせる一方、細部を見れば完全には一様でないことも分かる (British Library, mss. Add. 21104 [Rieu 1879-1883: III, 609a-612b] ; IO Islamic 51 [Éthé 1903: 688-692] ; IO Islamic 412 [Éthé 1903: 692-695] ; IO Islamic 1950 & 1951 [Éthé 1903: 685-695])。これらの写本には、従来研究が指摘する、この著名な詩人に帰される偽作の数々は無論含まれていないが、その詩人が晩年に仕えたトゥグルク朝時代に制作された歴史叙事詩 *Tuḡluq Nāmāh* や詩集 *Nihāyat al-Kamāl* といった真作は含まれていない。いずれにせよ「全集」の内容は、この詩人の著作の享受史の観点からさらなる検討に値する。なお南アジア出身のこの詩人の作品がペルシア語文化圏の他地域でも名声を獲得していたことは、他地域で編纂された詩人列伝に立項された同人の伝そのものが証している。なかでもティムール朝君主 Šāh Ruḥ の子 Ulūḡ Beg と Bāysunḡur がそれぞれ Nizāmī の五部作と Amīr Ḥusraw の五部作を最良にして、各々の優劣を論じ合ったとの所伝は注意に値する [TSh: 240]。 (M)

20 マウラーナー・ジャーミー Mawlānā Ḡāmi は、ティムール朝支配下のヘラートで活動した詩人 ‘Abd al-Raḥmān Ḡāmi (1414-1492) のこと。同人はナクシュバンディー教団のスーフィーであるとともに、神秘主義やハディース学に関する多数の著作をものした学者でもあった。このように多面的な著作家の「全集」がいかなる内容であったについては、十分な材料がない。ただし有力な参考資料として、サンクト・ペテルブルグの東洋学研究所に所蔵される Ḡāmi 自筆の「全集」写本 (ヒジュラ暦 890 年ズー・アルヒジャ月 10 日 (1485 年 12 月 18 日) の日付あり) [Rosen 1886: 215-259]、ないしはフランス国立図書館所蔵の「全集」写本 (著者生前の 1490 年および 1491 年にあたる日付複数あり) [Blochet 1928: 271-274] があることを指摘するに留めたい。いずれにせよこの著作家が、生前から南アジアのペルシア語著作家の関心の対象であったことは、例えばバフマニー朝の宰相 Maḥmūd Gāwān (1481 年没) が送った書簡の数々からうかがえる (この宰相の名文選 *Riyāḍ al-Inṣā’* に数点が収録されている [Ri: 19, 152, 165, 207, 227, 300, 365])。Ḡāmi が Maḥmūd Gāwān に送った書簡に自著の聖者伝 *Nafahāt al-Uns* の写本を送ったことも記されているという [Gross & Urunbaev 2002: 245-246, n. 277]。またその詩作品 *Yūsuf wa Zulayḥā* が、カシュミール地方のムスリム政権シャー・ミール朝の宮廷文人 Śrīvārā によってサンスクリット語に翻訳された事例 (1505 年) [Majumdar 1998] も、ムガル帝国時代以前の南アジアにおける、Ḡāmi の著作の幅広い享受を物語る。ムガル帝国の書庫を経て伝世した Ḡāmi 著作の写本は他の著作家 に比べても数多く、Seyller の網羅によれば、Akbar 宮廷に他所から伝来したもの [Seyller 1997: 282-283, 297, 301-302, 306-307, 320]、Akbar 宮廷のアトリエで製作されたもの [Seyller 1997: 290, 305-306, 336]、Akbar 宮廷に存在した確証はないがそれ以後の君主の書庫に伝世したもの [Seyller 1997: 282, 285-286, 289-290, 291, 295, 297, 300, 303, 331, 335, 337, 338, 339] など、さまざまな来歴を備えた写本が知られているという。 (M)

ニー²¹の詩集 (*Dīwān-i Ḥāqānī*)、アンワリー²²【の詩集】、そしてその他には歴史書の数々がいつも御前で読み上げられている。

言語に通じた者たちの指導により、ヒンド語、ユーナーン語、アラブ語、ペルシア語の書籍の数々が、絶えず、他の言語に移されている。例えば『ミールザー新天文表』 (*Ziğ-i Ġadid-i Mīrzā'i*)²³の一部はアミール・ファトゥフ・アッラー・

21 Afḍal al-Dīn Ḥāqānī (1126頃-1199頃) はイランで活動したペルシア語詩人 [Reinert E12: *Khākānī*]。いわゆる「奴隸王朝」君主 Ġiyāt al-Dīn Balaban の王子 Muḥammad Sulṭān が営んだ文芸サロン (*mağlis*) では『王書』、*Ḥāqānī* の詩集、*Nizāmī* の「五部作」が詠唱されていたとの記録がある [TFSB: 66-67]。また Amīr Ḥusraw は自らの詩論の中で *Ḥāqānī* とその詩集に言及している [DGhK: 25, 38, 41]。Abū al-Faḍl はこの詩人の詩集の縮約版の跋文およびもう一つの主著 *Tuḥfat al-ʿIrāqayn* の縮約版の跋文 (*iḥtītām*) を作成している (前者の執筆年代のみ 1591 年と知れる) [IAF: 240-241, 244-245]。 (M)

22 Awḥad al-Dīn Muḥammad Anwārī (1189 年あるいは 1191 年没) はホラーサーン地方で活動したペルシア語詩人。経歴の最初ではセルジューク朝スルターン Saṅḡar (在位 1119-1157) の宮廷詩人として活動した。Amīr Ḥusraw は自らの詩論の中で Anwārī に言及している [DGhK: 26, 38]。Abū al-Faḍl はこの詩人の詩集の縮約版の跋文を 1591 年に書いている [IAF: 245-246]。Anwārī の詩は、南アジアのペルシア語著作にしばしば引用される。例えば *Ġahāngīr* がそうであるし [JN (T) : 311; JN (A) : 274]、彼は自らの御前に伺候したイラン出身の詩人が Anwārī の *qaṣīdah* を献じたことを伝えている [JN (T) : 108; JN (A) : 91]。また王妃 Nūr Ġahān Begīm の父 ʿIṭimād al-Dawlah が死の間際、*Ġahāngīr* が見舞いに訪れると奇跡的に意識を回復したことを聞いた王妃は「このような時こそ Anwārī の句をお読みなさいませ」と対句一連を詠唱したという [JN (T) : 386; JN (A) : 339]。Asad Beg Qazwīnī もその回想録の末尾で Anwārī の詩句を引用しているし [AAB: 146; AAB (H) : 51r]、デカン地方の歴史書 *Burhān-i Maʿāṭir* や *Taḍkirat al-Mulūk* にも引用が見える [BM: 118; TM: 2r]。 (M)

23 学芸に秀でた王として名高いティムール朝第4代君主 Uluḡ Beg (在位 1447-49) の編纂による天文表を指す [Ghori 1985: 29; Ansari 2015: 34]。この天文表は、その成立後各地で広く利用され、*Ziğ-i Ġadid-i Sulṭānī*, *Ziğ-i Uluḡ Beg*, *Ziğ-i Gurgānī*, *Al-Ziğ al-Kurkānī*, *Ziğ-i Mīrzā Uluḡ Bik*, *Ziğ-i Saʿīd-i Ġadid-i Gurgānī* など様々な称された。アラビア語版やテュルク語版も作られ、後代の天文表にもそれに基づき作成されたものがある [Kennedy 1956: 125-126]。AA 第3部に列挙される 86 の天文表では、その最後に *Ziğ-i Gurgānī* の名で言及されている [AA: I, 266-267]。また Bābur は、Uluḡ Beg がサマルカンドの「コーハクの丘の麓にある天文台」を使って「今日世界中で利用されている『キュレゲン天文表 (*Ziğ-i kūrāgānī*)』を編纂した」と伝える [BN (Jtr.) : 88]。この天文表の訳および注釈としては [Sédillot 1847-53; Knobel 1917] がある。Uluḡ Beg の天文表は、16 世紀以降のインドの天文学にも大きな影響を与え、多くの写本が作られた。インド、パキスタン両国の図書館等には今も約 50 の写本が残る [Ansari 2015: 580-581]。またこれに基づいて編纂された天文表も複数知られている。Humāyūn の *munaḡḡīm* (天文学者-占星術師) であり、Akbar 宮廷にも仕えた Mawlānā (あるいは Mullā) Čānd が著した *Taṣṣīl-i Ziğ-i Uluḡ Begī* は、Uluḡ Beg の天文表に、当時の北インドの政治的・社会的・文化的状況に応じて省略・改訂等を施したものである。Šāh Ġahān 治世初期に

シーラーズイーの監修およびこのめでたき書の著者の通訳により²⁴、キシヤン・ジョーシー、ガンガーダル、マヘース・マハーナンドがペルシア語からヒンド語に移した²⁵。またヒンドゥースターンの古い書籍の一つである『マハーバーラタ』(*Mahābhārat*)の書はナキープ・ハーン²⁶、マウラーナー・アブド・アルカー

Mullā Farid al-Dīn (Amīr Faṭḥ Allāh Šīrāzīの弟子として知られる)によって編纂された *Ziğ-i Šāh Ġahānī* も Ulūğ Beg の天文表を基礎にしていた [Ghori 1985: 33-36; Ansari 2015: 581-585]。Ulūğ Beg の天文表が占星術の実践において利用された事例として、AN は、Mawlānā Čānd が Akbar の出生時のホロスコープの算出に *Ziğ-i Gurgānī* を用いたと伝える [AN: I, 23]。なお、Abū al-Faḍl はこの他に、Mawlānā Ilyās Ardabīlī, Ġōtik Rāi, Amīr Faṭḥ Allāh Šīrāzī の算出した Akbar のホロスコープにも言及している。このうち Ġōtik Rāi は「ヒンドゥースターンの munağğim たちの主要な校訂にしたがって」いたのに対し、Mawlānā Ilyās Ardabīlī は *Ziğ-i İlḥānī*、すなわちイル・ハーン朝初代君主 Hūlegü の時代に Naṣīl al-Dīn Ṭūsī (1201-74) が編纂した天文表に基づいていた。一方、Amīr Faṭḥ Allāh Šīrāzī が用いた天文表については不明である [AN: I, 27-40]。これら計4通りのホロスコープに見られる相違点、とくに Akbar の宮の違い (Mawlānā Čānd と Mawlānā Ilyās Ardabīlī が処女宮、Ġōtik Rāi と Amīr Faṭḥ Allāh Šīrāzī が獅子宮とする) および Abū al-Faḍl によるその解釈については [AN: I, 41-43]、またこれに対する Beveridge による注 [AN (Etr.): I, 125-128] を参照。(W)

²⁴ Amīr Faṭḥ Allāh Šīrāzī については [AA (Jtr.) (2): 93, n. 51] を見よ。イラーヒー暦を Amīr Faṭḥ Allāh Šīrāzī が 1584/5 年に *Ziğ-i Ġadīd-i Kūrgānī* (注 23 で言及された Ulūğ Beg の天文表を指すと思われる) に基づいて作成したことについては [AN: II, 10; AA: I, 277]。また 16 世紀末ないし 17 世紀初頭に帰される『天文表』の写本については [Seyller 1997: 319; Richard 2013: I, 501-503] を見よ。(M)

²⁵ 底本は「ヒンド語からペルシア語に」*az hindī ba-fārsī* とするが、諸写本はいずれも「ペルシア語からヒンド語に」*az fārsī ba-hindī* と作る [AA Ms. A: 49v; AA Ms. B: 54v; AA Ms. C: 43v]。*Ziğ-i Ġadīd-i Mīrzāī* がペルシア語で著された事実に照らしても、後者のテキストを採るのが妥当である。この不当なテキストを備えた底本に拠った英語訳、およびこれを無批判に踏襲した本訳注の解題はいずれも、Kišan Ġōši から Mahēs Mahānand に至る人名を書名と誤認した [AA (Etr.): I, 110; AA (Jtr.): I,]。また Rizvi は、これら三人の著書三点がペルシア語に翻訳されたものと誤解した [Rizvi 1975: 220]。なお三人の筆頭にあがる Kišan Ġōši なる人名の近代インド語形は、Kṛṣṇa Jyotiṣī (星学家の意) と復元できるが、この人物を Akbar および Ġahāngīr に仕えた Kṛṣṇa Daivajña に比定する学説は [Sarma 2008: 105-106]。なお当該箇所におけるテキスト上の問題および解題の誤り等については榊和良氏の教示を得た。記して謝意を表する。(M)

²⁶ Naqīb Ḥān (1614 年没) は、Mīr/Mīrzā Giyāṭ al-Dīn ‘Alī Qazwīnī が Akbar から 1581 年に授与された称号である。祖父 Mīr Yahyā (1481-1555) はサファヴィー朝君主 Ṭahmāsp 時代に活動した学者であり、とくに史学に造詣が深く、イラン通史 *Lubb al-Tawārīḥ* (1542 年完成) を執筆した。この祖父と父 Mīr ‘Abd al-Laṭīf (1573 年没) はスンナ派信仰の容疑で迫害を受け、後者は新天地を求めて子らとともにインドに向かった。そして即位直後の Akbar の宮廷に参上して、この君主の教師として活動した。‘Abd al-Laṭīf の弟 ‘Alī al-Dawlah も Akbar 宮廷に到来し、詩人列伝 *Nafā’is al-Ma‘āṭir* を執筆した(執筆開始は 1565/6 年) [THA: 190; HI: III, 176-177; RT: 580r]。この書物は 1596 年に完成した

ディル・バダーウニー²⁷、シャイフ・スルターン・ターネーサリー²⁸の尽力によ

Badā'uniの史書*Muntaḥab al-Tawārīḥ*所収の詩人列伝の基礎資料となった。このように Naqīb ḤānはイランからAkbarのもとに渡来した文人一族に属していたのであり、歴史書や伝記を著した人びとの係累としても、宮廷の文芸界で確たる地位にあったことは、史家Badā'uniと「兄弟」[MT: II, 30, 99, 228]のごとき親交を結んだことに現れている。またNaqīb Ḥānが君主Akbarに典籍を進講するなど、君主の「師」(aḥwund)としての親密な関係を有していたことも、*Mahābhārata*や後出の*Tārīḥ-i Alfī*といった帝国の編纂事業で主導的な役割が任されたことの背景をなしているはずである [TA: II, 264; MT: II, 30-31, 204, 228, 396; III, 97-99; AN: III, 396]。彼が「マジュリスの朋輩」[TA: II, 450]であったという伝記の記事は、そのようなNaqīb Ḥānの立場を示すものである。Ġahāngir即位後、同人はマンサブ1500を授与されたが、先代の朋輩に対する新君主の眼差しも「歴史学、人名考証にかけては、右に並ぶ者がいない」という敬意に満ちたものであり、君主主宰のマジュリスで談論を1608年から1611年にかけて記録した文献には、晩年のNaqīb Ḥānもたびたび登場している [JN (T) : 17; JN (A) : 12; MJ: passim.]。(M)

²⁷ 'Abd al-Qādir Badā'uni (1540-1615年頃)は、ムガル宮廷に仕えた知識人。ラージャスタンのバサーワルに生まれ、サンバル、アーグラなどで学んだ。アーグラでは、FayḍīとAbū al-Faḍlの父Mubārakからも教えを受けている。Fayḍīが1593年に書いた書簡によると、Badā'uniは宗教諸学だけではなく、天文学や数学、音楽などの知識も有していたという。1565年から9年間、ムガル貴族Husayn Ḥānのもとでサドルを務めたのち、Akbarに紹介されてムガル宮廷に職を得た。宮廷でのキャリア初期には礼拝のイマームを務め、宗教議論にも参加していたが、1580年代には翻訳事業への参加が主な職務となったようである。彼の代表作とされる*Muntaḥab al-Tawārīḥ*は、職務とは無関係に作成されたペルシア語の歴史書であり、1593年までの記述は友人でもあった官僚Nizām al-Dīn Aḥmadの*Ṭabaqāt-i Akbarī*の内容に大きく基づいている。一部にAkbarや彼の側近たちに対する批判的な記述が見られ、1615年頃までその存在は限られた人物にしか知られていなかった。MTは、ムガル宮廷での翻訳事業について、AAやANに挙げられていない人物に言及するなど、貴重な記録を含んでいる。また、Badā'uniは、本文に挙げられている*Mahābhārata* 翻訳以外に、1574年頃にインドの伝説的な王Vikramādityaの物語集である『獅子座三十二話』*Singhāsana Battisī*のペルシア語訳、1582年からは*Tārīḥ-i Alfī*の草稿の作成、1591年に*Muḡam al-Buldān*のペルシア語訳の一部、1591年に*Ġāmi-i Rasīdī* (『ラシード集成』) 収録のアッバース朝とウマイヤ朝のカリフ一族のMuḥammadとĀdamにまで遡る系譜のアラビア語からペルシア語への翻訳に関わったとMTの中で記している。なお、Badā'uniによると、サンスクリット語の著作のペルシア語への翻訳の際には、原典について解説するバラモンが選ばれ、ペルシア語の文章作成を担当する「翻訳者」と共同作業を行ったようである。このような協働関係は、のちのイギリス人学者とインド人知識人の関係と通じるものと言える [Gunther EI3: MT: II, 183, 318-319, 375, 384, III, 303-305; TA: II, 468; 二宮 2011; 大塚 2016: 87-88]。(N)

²⁸ Šayḥ Sulṭān Thanesarī. Badā'uniはSulṭān Ḥāḡgī Thanesarīと呼んでいる。Badā'uniの評伝によると、4年の間*Mahābhārata* 翻訳に携わっていたという。牛殺しの罪でターネーサルから追われ、一時Ḥān-i Ḥānānに仕えた。アスィールとブルハーンプル征服 (1600-1年?) の後にターネーサルのカローリーに任じられた。TAに名前が見えるMullā Sulṭān Thanesarī と同じか [MT: II, 320-321, III, 118-119; TA: II, 467]。(N)

り、ヒンド語からペルシア語になった。十万近くの詩句がある²⁹。陛下はこの昔の物語の名を『戦の書』(*Razm Nāmah*)と定められた³⁰。同じ訳者たちは『ラーマーヤナ』(*Rāmāyaṇa*)の書もペルシア語に移した³¹。これはヒンドの古い書物

29 Naqīb Ḥān 他によるペルシア語訳は散文訳なので、この説明はサンスクリット語原典に即したものである。十万句という数字の根拠については、Abū al-Faḍlが*Razm Nāmah*に付した序文で解説している [MaBh: I, si wa šiš]。(M)

30 このペルシア語訳の編纂にあたった人物として本書が挙げる三名の他に、Badā'unīはMullā ŠirīとFayḍīに言及する [MT: II, 320-321]。前者は、後出するMawlānā Širīに同じであり、その業績*Harbans*は*Mahābhārata*の補遺『ハリヴァンシャ』*Harivaṃśa*にあたる。Abū al-Faḍlがペルシア語訳に付した序文は、この補遺を本編と一体のものとして記述している [MaBh: I, si wa šiš - si wa haft, čihil]。補遺のこのような位置づけゆえに、Badā'unīも*Mahābhārata*の編者の一人にMullā/Mawlānā Širīを加えたのかもしれない。またFayḍīの働きについてBadā'unīは「韻文と散文を記す」ことであったと伝える。後出するとおり、Fayḍīは*Mahābhārata*第3巻に含まれる、いわゆる『ナラ王物語』に取材した詩作品*Nal Daman*を晩年に完成させているから、Badā'unīの記事はこのことと関係があるかもしれない。なおこのペルシア語訳の編纂が始まった時期をヒジュラ暦990年(1582/3)とする通説 [Rieu 1879-1883: I, 57a; Ivanow 1924: 770; Richard 1989: 38; Piemontese 1989: 284]はBadā'unīの記事に拠っている。しかしその記事の年代は誤りであり、むしろ同991年初頭のAkbar治世第28年初頭(1583年3月)ごろとする考証については [Mashita 2001: 64-65]。この考証を支える証拠として、同書が「ヒジュラ暦992年シャアバーン月(1584年8-9月)に」「一年半をかけて完成した」旨の編者Naqīb Ḥānのコロフォンを備えた写本については [Rieu 1879-1883: I, 57b]。(M)

31 インド古典籍*Rāmāyaṇa*のこのペルシア語訳が作成された経緯について、諸史料の記述は錯綜しており、Truschkeも認めるとおり、十分な解を導くことは難しい [Truschke 2016: 306, n. 6]。ペルシア語訳の作成者について、本書はNaqīb Ḥān, Badā'unī, Šayḥ Sultān Thanesarīの三名を挙げる一方、Badā'unī自身は翻訳に当たったのが自分一人であったものとして記述している [MT: III, 366]。さらにAkbarに献呈されたペルシア語訳*Rāmāyaṇa*を底本にして製作させた写本 (Freer Gallery of Art所蔵)に'Abd al-Raḥīmが自ら記した注記においては、「サンスクリット語からの翻訳」の実態が「Dew Miśrがシュローカの意味を語り、Naqīb Ḥānがペルシア語に訳した」というものであったとされている [Seyller 1999: 73, fig. 24]。またペルシア語訳作成の年代については、Badā'unīはヒジュラ暦992年(1584/5)にペルシア語訳作成の命が下り、4年にわたる作業の末、ヒジュラ暦997年ジュマダー・アルアッワル月(1589年1/2月)に完成したと伝えるが [MT: III, 336, 366]、'Abd al-Raḥīmの注記はその年代をヒジュラ暦996年とする [Seyller 1999: 73, fig. 24]。さらにMaharaja Sawai Man Singh II Museum (Jaipur)に所蔵されるAkbar下命のペルシア語訳原本の奥付の日付がヒジュラ暦996年ズー・アルヒジャ月28日(1588年11月18日)であることは、'Abd al-Raḥīmの注記が伝える年代を支持する材料である [Seyller 1999: 77, n. 3]。そもそもBadā'unīの年代説は、ヒジュラ暦992年と同997年との間隔を「4年」としているところに難点があるろう。但しSeyllerが論じているとおり、'Abd al-Raḥīmの注記は当の写本の製作年代をヒジュラ暦1007年(1598/9)とするものの、その写本に付された絵画にはそれよりも下る年代に属するものもあることから、事実の記述においてその注記の信頼性には疑問の余地がある [Seyller 1999: 75-76]。TruschkeはさらにBadā'unīがペルシア語訳をマ

の一つであり、そこではラーム・チャンド³²の行状が詳細に記されており、英知の奇聞の数々がたくさん書き込まれている。また『アタルバン』(*Atharban*)の書は、ここの人びとの考えでは、四部からなる神聖な書籍の一つであるというが、これをハージー・イブラーヒーム・スィルヒンディー³³がペルシア語にした³⁴。<I, 116> また『リーラーヴァティー』(*Lilāwatī*)はヒンドウースターンの知者たちが算術についてものした選りすぐりの作品であるが、長兄シャイフ・アブー・アルファイズ・ファイズィー³⁵が、ヒンド語というヴェールからこれを

スナヴィー体による韻文訳として作成したと記しているとして、その記事の信頼性を議論しているが、当の箇所にある文言は *mutannā*「写し、控え」であり、*matnawī* というのは英語訳の誤り (*couplets* と訳している) を踏襲した結果だろう [MT (Etr.): II, 378; Truschke 2016: 306, n. 6]。 (M)

32 底本は *Rām Čandra* とするが、諸写本はいずれも *Rām Čand* と作る [AA Ms. A: 49v; AA Ms. B: 54v; AA Ms. C: 43v]。注31のごとく、この翻訳に関与した *Badā'uni* もこの書物の内容を「*Rām Čand*の事績についての物語」と形容しているし [MT: II, 336]、注31で言及した *ʿAbd al-Rahīm* の注記においても *Rām Čand* と記されている (但し Seyller は *Rāmachandra* と写している) [Seyller 1999: 73, fig. 24]。 (M)

33 *Ḥāḡḡī Ibrāhīm Sirhindī*. *Badā'uni* は、1582年に *Naqīb Ḥān* らとともに *Tārīḥ-i Alfī* の執筆に最初に関わった人物の中に彼の名を挙げている。翻訳活動以外の経歴としては、1580年にグジャラートのカーディーに任じられたが、数年後に罷免され、取り調べの上ランタンボールの砦に投獄されている。*Badā'uni* は、彼が *Tārīḥ-i Alfī* の執筆を命じられたのはちょうどグジャラートから戻って来た頃だとしているので、カーディーを罷免された後に新たな仕事として *Tārīḥ-i Alfī* 執筆を命じられたのかもしれない。AAの知識人リストには *Qāḍī Ibrāhīm*、TAには *Ḥāḡḡī Ibrāhīm Sirhindī* の名が見えるが、Blochmann はこれらを全て同一人物とみなしている [AA: I, 235; AA (Etr.): I, 617; AN: III, 408-409; MAhmadi: 140, 142; MT: II, 173, 187-188, 210-211, 312, 318-319, III, 50-51; TA: II, 464]。 (N)

34 *Atharban* はアタルヴァ・ヴェューダを指す。*Badā'uni* はこのペルシア語訳作成について本書よりも詳しい事情を伝えている。それによるとデカン地方から *Akbar* 宮廷に参上した *Šayḥ Bhāwan* なる元バラモンの改宗ムスリムが、1575年ごろ「ヒンドの人々の間に知られている四つの書物のうちの第四の書物であり、その定めいくつかはイスラームの宗教 (*millat*) に一致する」という *Bid-i Atharban* を「説明する」よう *Akbar* に命じられ、*Badā'uni* にはその説明を「ヒンド語からペルシア語に翻訳する」よう王命が下った。しかしその元バラモンの説明が難解で要領を得ない旨、*Badā'uni* が上申した結果、「翻訳」の役割はまず *Fayḍī* に命じられ、その後 *Ibrāhīm Sirhindī* に命じられたという。ただし *Badā'uni* は「彼はその痕跡を残さなかった」と記すとおり、本書の記述が示唆するところに反して、このペルシア語訳は実際には完成しなかったようであり、現在のところ伝本は知られていない [MT: II, 212-213]。 (M)

35 *Šayḥ Abū al-Fayḍ Fayḍī*. 本書の著者 *Abū al-Faḍl* の兄 *Fayḍī* については [AA (Jtr.) (2): 81-82, n. 21]。 (M)

引き出して、ペルシア語というマントを着せかけた³⁶。さらにタージク (Tāġik) の書は、星学に関して権威ある著作であるが、至高の御命令により、ムカンマル・ハーン・グジャラーティーがペルシア語にした³⁷。また世界の征服者たる陛下の『事績録』(Wāqī'āt)³⁸は、事情に通じた者にとっての行動規範 (dastūr al-'amal) であるが、ミールザー・ハーン・ハーニ・ハーナーン³⁹がテュルク語か

36 『リーラーヴァティー』*Līlāvati*はBhāskara2世(1114?)が著した数学書(1150年成立)。Akbarの下命によりFaydīはこの書をペルシア語に翻訳した。その序文を執筆した当時は「陰暦995年にあたるイラーヒー暦第32年」(1587年に相当)であったとFaydīは書いている[Lilavati: 3]。サンスクリット語原典にこのペルシア語訳を詳細に対照させた研究によると、ペルシア語のテキストには原典に比して省略と追加のいずれも見いだせるという[Sarma & Zamani 2019]。(M)

37 Sarmaによると本文における「タージク」Tāġik / Tāġikaとは特定の書籍をさすのではなく、アラビア・ペルシア天文学をインド風に翻案したサンスクリット語の星学書の一群を指すという[Sarma 2008: 104, n. 86]。本訳注はこの説に従った。なおSarmaによると、そのような星学書の代表例が、Akbarの近臣Tōdarmalに仕えた星学家Nīlakaṇṭhaが1587年に著した、イスラーム天文学に関するサンスクリット語の手引書Tājikanīlakaṇṭhiであるが、これがほぼ同じ時期に即座にペルシア語に翻訳されるというのは考えにくい。本書のいう「タージクの書」をこれに比定するのは難しいという[Sarma 2008: 104, n. 86]。なおムカンマル・ハーンMukammāl Ḥān Guḡarātīについては、グジャラート地方で1591年に戦没したŠayḥ Kabirなる人物の父親がMukammāl Ḥānという名であることが史料に伝わるが[AN: III, 594]、本書の人物と同じである確証はない。さらにそのMukammāl Ḥānが、1584年のグジャラート戦役に参加し[AN: III, 424]、1586年に殺害されたMukammāl Begなる人物がMukammāl ḤānにあたるがごとくAN公刊本の編者は索引に立項しているが、これはおそらく当たらない。帝国人士の称号をBegからḤānへ更改するプロモーションが通常であったことを考慮すると、Ḥānの称号をかつて有した者がBegとして没するのは考えにくいからである。(M)

38 ムガル帝国の初代君主Bāburがチャガタイ・トルコ語で著したいわゆるBābur Nāmahのこと。Bābur Nāmahという書名が通称に過ぎず、元来の書名が『ワカーイー』Waqāyī'であったこと、また本書に見える語形Wāqī'ātをこれと同義と見なせることについては[間野 2001: 16-18]。なおAbū al-FaḍlがBābur Nāmahという通称を用いている例もある[IAF: 177]。(M)

39 Mīrzā Ḥān Ḥān-i Ḥānān. HumāyūnからAkbarの時代にかけて力を振るったBayram Ḥān (1561年没)の息子(1556-1627)。「Abd al-Raḥīm」の号で知られる。失脚した父親が殺害された年、彼はMīrzā Ḥānの称号を与えられた。君主との間の親密な主従関係は、後に君主が彼を「息子」と呼ぶほどであった[MR: II, 108, 113]。このBābur Nāmahペルシア語訳は1589年にAkbarに提出された[AN: III, 570]。Ḥān-i Ḥānānの系譜や経歴、および関連する従来研究については[真下 2017: 128-132]を見よ。その箇所で、この貴族のカラ・コユル系譜を伝える史料として言及しなかったMMumを補っておきたい[MMum: 426-427]。またその後に出た研究論文集[Hossain & Ray (eds.) 2017]は、この貴族のヒンディー語詩など、従来、十分には扱われてこなかった側面にも目配りした有益な成果である。(M)

らペルシア語に移した。また『カシュミールの歴史』(*Tārīḥ-i Kaśmīr*)は、その地方の四千年にわたる諸状況であるが、マウラーナー・シャー・ムハンマド・シャーハーバーディー⁴⁰がカシュミールの言葉からペルシア語に変えた⁴¹。『諸国辞典』(*Mu‘ğam al-Buldān*)⁴²は諸国・諸都市の状況に関する優れた書物で

40 Mawlānā Šāh Muḥammad Šāhābādī. “*Rāḡataranginī*” (注41)の翻訳者として知られる。ANによると1598年に死亡。翻訳活動以外の経歴としては、1581年にMullā Širi (注47)らとともにパンジャープのサドルに任じられている。AAの知識人リストに見られるMawlānā Šāh Muḥammadは同一人物かもしれない。なお、Badā’ūnīによると、彼は1595年にAkbarに忠誠の誓いを行って「ムリード(弟子)」になり、またマンサブ200相当のジャーギールを与えられていた。Akbarが、自らのイデオロギーに賛同し、皇帝に忠誠を誓う家臣との間にスーフィズムの師弟の誓いと類似する儀式を行っていたことについては[Franke 2014: 129; Lefèvre EI3]を参照。このような君臣間の擬似的師弟関係はČahāngīrの時代にも続けられていた。近年、このような儀礼は、王家がスーフィー導師の家系であるサファヴィー朝の存在や、ヒジュラ千年紀における宗教の革新者の登場という思想を背景とした、皇帝の神格化を目指す動きの一環と位置付けられている[AA: I, 233; AA (Etr.): I, 609; AN: III, 743; MT: II, 295-296, 374, 404-405; TA: II, 464; Franke 2014: 129; Lefèvre EI3; 小倉2018: 34-35]。(N)

41 この『カシュミールの歴史』という書物が本書に後出する“*Rāḡataranginī*”にあたることは疑いない[AA: I, 578]。その*Rāḡataranginī*が、12世紀のKalhaṇaによって著された*Rājataranginī*ばかりでなく、その続編として16世紀前半までに書かれた一連の三点の著作をも含めた総称であることについて、簡単には[小倉2010: 38-39]。その原著は「カシュミールの言葉」で書かれていたと本書は言うが、*Rājataranginī*はサンスクリット語で書かれている。またAkbarがŠāhābādīにペルシア語訳の作成を下命したのが、1589年7月であることの考証は[Ogura 2010/2011: 33-37]。なおAkbarはヒジュラ暦999年(1590/1)、このペルシア語訳の改訂を史家Badā’ūnīに命じている[MT: II, 374]。「二ヶ月をかけて」作成された改訂版は『『書籍の館』に収められ、範例として読まれている」とBadā’ūnīは述べるが、本書AAで参照されたのが、Šāhābādīの原版とBadā’ūnīの改訂版のいずれであるのか、定かではない。ペルシア語訳の現存する写本三点についても、これをŠāhābādīの原版と論じるOguraの主張に対して、Slajeは慎重な見解を示している[Ogura 2010/2011: 33-37; Slaje 2014: 50, n. 66]。(M)

42 Yāqūt (d. 1229) 著の地名辞典。(M)

あるが、タッタのムッラー・アフマド⁴³、カースイム・ベゲ⁴⁴、シャイフ・ムナツ
フル⁴⁵その他数名からなる、言葉に通じた者たちの一団が、アラビア語 (luḡat-i

43 Mullā Aḥmad Tattahī. 底本とB写本はTTH (Tattah) (底本はバリエントとしてTNH (Tanahī) を挙げる)、A写本はTTH' (Tattahī) としている [AA Ms. A: 49v; AA Ms. B: 54v]。タッタ出身者を指す表現としては、Tattahī と Tattawī があり、この人名は、『千年史』*Tārīḥ-i Alfī* の執筆者の一人で、1588年に死亡した Aḥmad Tattawī (注56) と同名と解釈できる。ただし、Badā'uni が、*Mu'ḡam al-Buldān* の翻訳事業について触れているのはヒジュラ暦999年ラビー II 月 (1591年2～3月) に関する叙述部分であり、この時には *Tārīḥ-i Alfī* の執筆者である Aḥmad Tattawī は死亡している [AN: III, 527; MT: II, 364-365, 375]。Badā'uni は、*Mu'ḡam al-Buldān* の翻訳が決定され、10-12名の翻訳者が選ばれて自らが担当部分を翻訳するまでの一連の流れを一箇所で書いているが、実際には、Badā'uni が自分の担当分の翻訳を提出したのがヒジュラ暦999年ラビー II 月であり、*Mu'ḡam al-Buldān* 翻訳事業自体は数年前に開始されていたと考えたと矛盾は解消できる。あるいは、*Mu'ḡam al-Buldān* 翻訳者の Aḥmad Tattahī と *Tārīḥ-i Alfī* 執筆者の Aḥmad Tattawī が別人という可能性もあるが、AN や MT には、1588年の後に Aḥmad Tattahī (タッタ出身の Aḥmad) という人物は登場しない。もしかしたら、AA の記述に何らかの混乱があるのかもしれない。(N)

44 Qāsim Beg. 類似の人名が複数の史料に登場するが、いずれもこの人物に比定する決め手に欠ける。AN は、1586年初頭に Qāsim Beg Tabrizī という人物がオルドの Mīr 'Adl に任じられたとする。これは、THA において、1590年以前にしばらく Mīr 'Adl であったとされる Qāsim Beg Tabrizī と同一人物である可能性が高い。AN には、1599年に Qāsim Beg Tabrizī なる人物が死亡したという記録もある。また、AN には、1589年のオルドの Mīr 'Adl として Qāsim Khān なる人物も見られ、称号は異なるが Qāsim Beg Tabrizī と同一人物である可能性は排除できない。さらに AN には、1591年にマールワーに向かう Sulṭān Murād の随員として Qāsim Beg Tabrizī と Qāsim Beg という人物が挙げられており、いずれかが Mīr 'Adl であった Qāsim Beg Tabrizī と同一人物かもしれない。IAF には、Murād のディーワーンである Qāsim Beg Tabrizī 宛の書簡が1通、Qāsim Beg Khān Tabrizī 宛の書簡が2通見られる。前者は、AN で Sulṭān Murād の随員とされていた Qāsim Beg Tabrizī の可能性が高い。なお、AA のマンサブダールリスト中、200マンサブの人物の中に Qāsim Beg Tabrizī が、知識人リストに Qāsim Beg が登場し、TA のウラマー列伝の中には Qāsim Beg Tabrizī という人名が見える [AA: I, 230, 233; AA (Etr.): I, 582, 611; AN: III, 477, 538, 599, 751; IAF: 176-181; TA: II, 468; THA: 376]。(N)

45 Šayḥ Munawwar. Badā'uni は、ラホールのウラマーの一人として Šayḥ Munawwar の名を挙げている。彼は1578年にマールワーのサドルに任じられたという。Blochmann は、AA の知識人リストに見える Šayḥ Munawwar を、『諸国辞典』*Mu'ḡam al-Buldān* の翻訳者であり、かつ Badā'uni が記録する Šayḥ Munawwar と同一人物であると考えている。Gulzar に評伝が見える Šayḥ Munawwar b. 'Abd al-Maḡīd という人物は、Akbar に仕えて1577-8年にマールワーのサドルになったとされており、Badā'uni が記録する Šayḥ Munawwar と同一人物である可能性が高い。彼は1603年にアーグラに召喚された際に死亡し、ラホールの父祖の墓に葬られたという。また、晩年は5年ほどグワーリユールの砦で獄中生活を送りながら執筆活動をしていたとされている。なお、Gulzar では彼の著作が紹介されているが、その中に『諸国辞典』*Mu'ḡam al-Buldān* 翻訳は含まれていない。TA には Mullā Munawwar と Šayḥ Munawwar Āgrah という人物が見られるが、ど

Tāzī) からペルシア語に移した。また『ハルバンス』(*Harbans*) はキシヤン⁴⁶の諸状況を含むが、マウラーナー・シーリー⁴⁷がペルシア語で記した⁴⁸。さらに『カリーラとディムナ』(*Kalilah wa Dimnah*)⁴⁹は、実用的な英知に関する驚異的な作品であるが、ナスル・アッラー・ムスタウフィー⁵⁰とマウラーナー・フサイン・ワーイズ⁵¹がペルシア語に移しかえていたとはいえ、奇抜な隠喩や難解な単

ちらかがこの人物に相当するかもしれない [AA: I, 235; AA (Etr.): I, 617; Gulzar (P): 432-435; Gulzar (T): 542-546; MT: II, 277, III, 52; TA: II, 461, 478] (N)

46 Kišan. ヒンドゥー教の神 Kṛṣṇa の近代インド語形。(M)

47 Mawlānā Širī. TA では Mullā Širī Lāhawri と表記され、「平民の生まれ (‘ammi)」とされている。Badā’uni は彼を Mullā Širī と呼び、「ヒンディーの詩人」と形容している。MT には彼の詩が数多く引用されている。1581 年に Muḥammad Šāhābādī らとともにパンジャブのサドルに任じられ、1583 年にも同職にあった。1586 年、カーブル方面への遠征に同行した折に死亡した [MT: II, 55, 108, 201, 233, 295-296, 308-309, 320, 336, 350; TA: II, 490-491]。(N)

48 注30に記したごとく、*Harbans* は *Mahābhārata* の補遺 *Harivaṃśa* にあたり、本文の説明も、この補遺を本編とは別の著作と見なしており、これに従う学説もある [Beach 2012: 59-60]。実際、伝世している *Mahābhārata* ペルシア語訳『戦の書』の諸写本には、補遺を含まないものが多い。しかし Abū al-Faḍl が *Mahābhārata* ペルシア語訳『戦の書』に付した序文は、この補遺を本編と一体のものとして記述している [MaBh: I, si wa šiš - si wa haft, čihil] し、Truschke は Akbar 時代に製作された『戦の書』写本が *Harbans* をその一部として含んでいる事実を重視している [Truschke 2016: 282, n. 37]。(M)

49 本文は *Kalilah Dimnah* とあるが、Ms. A に従い、*wa* を補った [AA Ms. A: 49v]。(M)

50 Nizām al-Dīn Abū al-Ma’ālī Naṣr Allāh b. Muḥammad. ガズナ朝の Bahrām Šāh に書記として仕え、Khusraw Malik (在位 1160-1186) のワズィールとなったが、スルターンの不興を買い獄中死した。曾祖父はサーマーン朝に仕え、祖父 Aḥmad はガズナ朝の Mas’ūd のワズィールに任じられている。Naṣr Allāh は友人から入手した写本に基づき、1144 年から 1146 年の間に *Kalilah wa Dimnah* のペルシア語訳を作成し、Bahrām Šāh に献呈した。この翻訳は散文作品の傑作として知られるようになり、Bal’āmī (940 年没) や Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Buḥārī (12 世紀) による翻訳を超える評価を獲得した。Browne によると、Waṣṣāf や *Haft Iqlīm* の著者 Amin Aḥmad Rāzi もその文体を讀んでいるという。また、1327 年にアイユーブ朝で筆写された写本に、この翻訳に基づくアラビア語訳が見られるという。Omidšalar は、この作品は翻訳というよりも新たな文学作品であると評価している。IAF で挙げられている *Kalilah Dimnah* は、この翻訳を指している可能性がある。Akbar 時代の写本については注 86 を参照 [Brockelmann, EI2; Browne 1902-1906: II, 349; IAF: 82; Omidšalar EIr: Kalila wa Demna ii. The Translation by Abū’l Ma’ālī Naṣr-Allāh Monšī; Riedel EIr: Kalika wa Demna i. Redactions and Circulation]。(N)

51 Kamāl al-Dīn Husayn b. ‘Alī al-Wā’iz al-Kāšifī (1504-5 年没)。ティムール朝時代の文人、スーフィー。1436-7 年頃サブザワールに生まれ、ニーシャープールやマシュハドに滞在したのち、1456 年頃にヘラートで ‘Abd al-Raḥmān Ġāmī に弟子入りしている。一時、Abū Sa’id 治下のサブザワールのカーディーを務めた後、1470 年に Husayn Bayqarā

語があったため、庭園を飾るめでたき御方の御命じにより、このおどろくべき書の著者【Abū al-Faḍl】がペルシア語によって新たな外衣をまとわせた。これは『知識の試金石』（*‘Iyār-i Dāniš*）⁵²と知られるようになった。またナルとダマンの情愛の物語は詩心のある人びとの肝を溶かすようなヒンド語の作品であるが、これをシャイフ・ファイズイー・ファイヤーズイー⁵³が『ライラーとマジヌーン』（*Laylā Maḡnūn*）の韻律にもとづく韻文にととのえた。これは『ナル・ダマン』（*Nal Daman*）として世間に知られるようになった⁵⁴。

治下のヘラートに移住し、ヘラートの Dār al-Siyāda のシャイフに任じられた。‘Ali Šir Nawā’ī も彼のパトロンの一人であった。ヘラートの多くの施設で説教を行い、*Ahlāq-i Muḥsinī*、*Lubb-i Lubāb-i Maṭnawī*、*Rawḍat al-Šuhadā* など、様々な分野で多くの著作を著した。息子 ‘Ali は、ナクシュバンディー派の伝記集 *Rašahāt ‘Ayn al-Hayāt* (1504 年成立) の作者である。Ḥusayn al-Wā’iz al-Kāshifī による *Kalilah wa Dimnah* 翻訳は、おそらく 15 世紀末頃に、Naṣr Allāh によるペルシア語版を参照しながら作成され、Ḥusayn Bayqarā の宰相 Aḥmad Suhaylī の名にちなんで『スハイリーの光輝』*Anwār-i Suhaylī* と名付けられた。Browne は美文調の文体を酷評しているが、この翻訳はインドでは高く評価されており、よく知られていた。*Ḥulāṣat al-Makātīb* (注 7) では、*Anwār-i Suhaylī* が読むべき物語の一つとしてあげられている [Brockelmann, EI2; Browne 1902-1906: II, 350-354; Paul EI: ‘Ali b. Ḥusayn al-Wā’iz al-Kāshifī; Subtelny EI: Kāsefi, Kamāl-al-Dīn Ḥosayn Wā’e; Yousufi EI2: Kāshifī; Sufi 1941: 78; Wickens EI: Anwār-e Sohaylī]。School of Oriental and African Studies や Chhatrapati Shivaji Maharaj Vastu Sangrahalaya (旧 Prince of Wales Museum of India) には、Akbar 時代に作成された *Anwār-i Suhaylī* の挿絵付き写本が所蔵されており、Seyller は、ムガル帝国君主が所蔵した経歴がある *Anwār-i Suhaylī* の挿絵付き写本 3 点を特定している [Seyller 1986: 130; Seyller 1997: 291, 294, 304]。なお、Natif は、1570 年代のムガル帝国での作成とされてきた SOAS 写本について、1570 年代にブハラでテキストと挿絵の一部が作成された後にインドに持ち込まれ、1585 年から 90 年頃にムガル帝国のアトリエで残りの挿絵が作成されたと考えている [Natif 2008: 354]。(N)

52 *‘Iyār-i Dāniš* の跋文によると、この書物はヒジュラ暦 996 年シャアバーン月 15 日 (1588 年 7 月 10 日) に完成したという [ID: 300]。 *Anwār-i Suhaylī* の難解な文体を改めた新たなペルシア語訳として Abū al-Faḍl は、Ḥusayn Wā’iz が Naṣr Allāh の *Kalilah wa Dimnah* から削除した二つの章を復元したと述べており、本書は単に表現の調整だけでなく、内容の変更さえ含む改訂版であったと考えられる [ID: 8]。(M)

53 Šayḥ Fayḍī Fayyāḍī. 本書の著者 Abū al-Faḍl の兄であるこの人物について詳しくは [AA (Jtr.) (2) : 81-82, n. 21] を見よ。(M)

54 *Nal Daman* は *Mahābhārata* 第 3 巻に含まれる王子ナラ王と王女ダマヤンティーとの愛情物語に取材した詩作品である。Fayḍī が *Nal Daman* を Akbar に献呈したのが 1594 年 12 月下旬であること、同書が詩人 Nizāmī の「五部作」の韻律に倣って Akbar 治世第 30 年 (1585/6) から計画されていた Fayḍī の五部作の一部であったことについては [AN: III, 661]。(M)

王中の王たる御方の神聖なる御心は、伝承の混乱⁵⁵を認識されたので、最近千年間に七気候帯で生じた諸状況を集録するようにと、歴史に詳しい見識者たちに至高の御命令が下された。最初はナキーブ・ハーンらの一団が始めた。さらにマウラーナー・アフマド・タッタウィー⁵⁶が大部分を原稿のかたちにした。そしてジャアファル・バグ・アーサフ・ハーン⁵⁷が完成させ、跋文 (*ḥuṭbah*) はこのめでたき書の著者が執筆した。同書は『千年史』(*Tārīḥ-i Alfī*)⁵⁸と名付けられた。

55 底本は *ḥazānah* とし、英語訳はこれを踏襲して一連の語句を、伝承の「宝蔵」*treasure* とするが、*Ms. B* と *Ms. C* は *ḥarābah* 「混乱」とする。ここでは文脈に照らして後者を採った [*AA* (Etr.) : I, 113; *AA Ms. B*: 54v; *AA Ms. C*: 44r]。(*M*)

56 *Mawlānā Aḥmad Tattawī. Badā'uni* は、1582年にムガル宮廷に加わった *Mullā (Ḥakīm) Aḥmad Tattawī* が、*Tārīḥ-i Alfī* の36年目以降の記述を *Naqīb Ḥān* らから引き継いだとしている (注58)。TAにも *Ḥakīm Aḥmad Tattawī* の名が見える。*Badā'uni* によると、*Mullā Aḥmad Tattawī* はスインドの出身で、シア派支持者になってサファヴィー朝下のイラクに渡ったが、*Šāh Ismā'il* 2世の治世にイラクを脱出してメッカ巡礼を行い、デカン経由でムガル宮廷にやって来たという。彼が1588年1月に宗派論争の恨みから襲撃されて死亡したことはANも記録している。また、*MMum* は、医学や文字学 (*ḥurūf wa rumūz*) に関する著作もあることを伝えている。彼が *Mu'ḡam al-Buldān* 翻訳に関わっていた可能性については、注43を参照 [*AN*: III, 527; *MT*: II, 317, 319, 364-365, 392-393, III, 168-169; *MMum*: I, 590-592; *TA*: II, 482]。(*N*)

57 *Ġāfar Beg Āṣaf Ḥān. Qazwīn* 出身。先んじて渡来し *Āṣaf Ḥān* の称号を得ていたおじ *Ḥwāḡah Ġiyāt al-Dīn 'Alī* (1581/2年没) の仲介で1577年12月、*Akbar* への拝謁を果たした [*AN*: III, 228] (ちなみにおじ *Ḥwāḡah Ġiyāt al-Dīn 'Alī* は、別の家系に属する *Qazwīn* 出身者で *Naqīb Ḥān* と号した *Mirzā (ないし Mirzā) Ġiyāt al-Dīn 'Alī* (注26) と、同時代史料においてさえ混同されるので要注意である)。その後、亡きおじの称号 *Āṣaf Ḥān* を授与され、遠征軍付属の軍務官 (*baḡṣī*) (1584年) [*AN*: III, 440]、州政府軍務官 (1586年) [*AN*: III, 511] のごとく、各種の軍務官職を経験した。さらに在任期間を正確に限定することはできないが、1599年までの間に三度にわたり大バフシ (軍務長官) をつとめた形跡があり、このことゆえに本書も大バフシ職の経験者の一人として同人を挙げている [*AA*: I, 232]。同人大バフシ職在任期間の考証については [真下 2012: 95, 520] を見よ。また1599年には財務長官 (*diwān-i kull*) に任命された [*AN*: iii, 758]。Ġāhāngir時代には1607年に財務長官に再任されたが [*JN* (T) : 60-61; *JN* (A) : 50]、Ġāhāngir は自らの王子時代に同人が「軽率の数々」を働いていたにもかかわらず重用したものであることを明かしている [*JN* (T) : 127; *JN* (A) : 108]。1612年5月ごろ、王子 *Parwiz* が率いるデカン戦役のなかブルハーンブルで没した。享年63歳と伝わる [*do.*]。上記の官歴とは別に、同人の詩才は同時代人の評価するところであり、本書および *MT* の詩人列伝に立項されている [*AA*: I, 246; *MT*: III, 216-217]。本書はさらに同人の書記術 (*bitikcī-gari*) にも言及しており [*AA*: *do.*]、以上のような文才によって同人は *Tārīḥ-i Alfī* の執筆を下命されたものと考えられる。なお *Ġāfar Beg Āṣaf Ḥān* の属する一族については [*Habib* 1969] が整理しているが、上記のような人名の誤認など、史料批判を欠く問題点も多く、参照には注意を要する。(*M*)

58 預言者 *Muḥammad* が死去したヒジュラ暦第11年を元年とする太陰暦年リフラト

〔「逝去」の意〕年を用いた編年体のイスラーム世界史であるが、後半の叙述はほぼインド、イラン、中央アジアの記事に限られる。この歴史書の編纂の経緯については *Badā'uni* の記述が詳しい。それによるとヒジュラ暦990年(1582/3)、ヒジュラ暦第一千年紀の満了を期して「その他諸々の史書を凌ぐような、今日までのイスラームの諸王の事績のすべてについての史書」を編纂すべしとの王命が下ったという(Rieu およびおそらくこれに従った *Ethé* と *Storey* は下命の年代をヒジュラ暦993年とするが誤りである [Rieu 1879-1883: I, 117; *Ethé* 1903-1937: I, 39; *Storey* 1927-1939: 118-121])。当初7名の執筆者すなわち *Naqīb Ḥān* (注26)、いずれもイラン出身の文人である *Amir Šāh Fath Allāh*、*Ḥakīm Humām*、*Ḥakīm 'Alī* の3名、さらに *Ḥāğgī Ibrāhīm Sirhindī* (注33) そして後にインド・イスラーム総合史 *Ṭabaqāt-i Akbarī* (1594年完成) を執筆することになる *Nizām al-Dīn Aḥmad* と、デリー・イスラーム総合史 *Muntaḥab al-Tawārīḥ* (1596年完成) を執筆することになる *Badā'uni* が任じられ、それぞれ分担して執筆が始まった。本書が言う「ナキーブ・ハーンらの一団」とはこの7名を指すが、*Naqīb Ḥān* がリーダーであったことをうかがわせる証拠はない。その後ほどなく執筆者の間で、執筆内容をめぐり紛議が生じたため、リフラト第36年以降の記事は、*Mullā Aḥmad-i Thatah* (*Mawlānā Aḥmad Tattawī*) (注56) が単独で執筆するよう命じられた。彼は1588年に殺害されるまでに「チンギズ・ハンの時代に至る」「第二巻」までを完成させていたが、その続きはヒジュラ暦997年(1579/80)までの叙述を *Āṣaf Ḥān* が担当するよう命じられた(この部分が「第三巻」にあたる。*Badā'uni* の記事を信じれば、*Aḥmad Tattawī* が「大部分を仕上げた」という本書の主張は疑わしいことになるだろう)。その後ヒジュラ暦1000年(1591/2)に、全巻の修訂が命じられ、*Badā'uni* が第一巻と第二巻を、*Āṣaf Ḥān* が第三巻を担当した [MT: II, 318-319]。このうち第一巻の修訂版は1594年4月に *Akbar* に進呈されたとの記録がある [MT: II, 392]。ただし既知の現存諸写本にはヒジュラ暦997年までカバーするものはなく、この歴史書の最末尾の原型は不明である。*British Library* 所蔵の *India Office* 旧蔵写本 (IO Islamic 3293) がヒジュラ暦997年までを含んでいるとする *Ethé* の説明は誤りであり、実際には本写本はヒジュラ暦984年(リフラト第974年)の記事の途中で終わっている [*Ethé* 1903-1937: I, 40, no. 112; *TAlf* (IO MS): 494v]。テヘラーン刊本もヒジュラ暦984年のおおよそ同じ箇所までしか含まない (*TAlf* VIII, 5929)。ことによると、本書が主張する *Abū al-Faḍl* の「跋文」が、現存する *Tārīḥ-i Alfī* に見いだせないのも同じ理由によるかも知れないが、同人の文集たる *IAF* にも「跋文」は収録されておらず、詳細は分からない。なおかつて *Rizvi* は、この歴史書のテキストが、*Khuda Bakhsh Oriental Public Library* 所蔵の著者不明・原題不明の孤本で *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah* の通称で知られる写本の本文に転用されたと推測していた [*Rizvi* 1983: 125]。Akbar 宮廷で活動した画家たちが製作した多数の挿絵で飾られた豪華写本 *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah* は未だ出版されておらず、その本文を詳細に検討することはできない。しかしこれまでに出版されたりオンラインに公開されたりしたごく少数の挿絵に見える本文や写本カタログの記述に引用された本文を調査すると、*Timūr* に関する記事にせよ、*Akbar* に関する記事にせよ、そのテキストは *Tārīḥ-i Alfī* 刊本の当該箇所と一句と違わず同じである (*Timūr* 死去の記事 [Khuda Bakhsh Oriental Public Library n.d.; the last page; *TAlf* VII, 4985, ll. 9-19]。1570年に *Akbar* が *Šayḥ Farīd al-Dīn Šakar-gaṅg* の墓廟に詣でる道で行った狩りの記事 [UNESCO (Akbar); *TAlf* VIII, 5866, ll. 2-12]。1573年にグジャラート遠征を終えた *Akbar* がその帰路 *Sirōhi* に到着したことの記事 [Abdul Muqtadir 1921: 42; *TAlf* VIII, 5891, ll. 17-18])。『イスラーム世界年代記』としての *Tārīḥ-i Alfī* の本文を「ティムール朝史」たる *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah*

周知のごとく、似姿をえがく (*šabih-kaši*) ことを描写 (*taṣwīr*) という⁵⁹。勉強と娯楽のいずれのためであれ、これが選りすぐりの元手であることゆえに、世界の主たる御方は物心付いた頃から、このわざに心を寄せておられ、その流行と活況をお求めになった。こうしたことから、このすばらしい魅惑の画業に裝飾が加えられ、一群の大集団が名声を得たのである。ダルガたちと書記 (*bitik-či*) たちが毎週、各人の作品を天覧に届け、出来の良さの程度に応じて恵与が下

がどのように取捨しているのか、今後の精査が必要だとはいえ、Rizviの見立てそのものは前向きに検討される必要があろう。但し *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* のテキストの著述年代を次のように推考すると、Rizviの見立てとは逆に *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* が *Tārīḥ-i Alfī* の素材であった可能性も浮上する。すなわち *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* 写本は1573年の記事の途中で破断しているため、Akbar 治世のどの時期までをカバーしていたかを直接知ることはできないものの、この写本に書き込まれた君主 *Šāh Ġāhān* 直筆の書き込みが「この歴史書は王様 [Akbar] の御代の第22年 [西暦1577/8年] まで」を記録していると述べていることは、元来の著作の収録時期と制作時期を示唆する有力な材料である [Khuda Bakhsh Library: Front cover: UNESCO (Shah Jahan)]。また *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* に用いられた挿絵群の製作年代について1580年代とする美術史家の諸説 (c. 1580 [Beach 1987: 86, 88, 112, 116, 118, 126] ; sometime before 1584 [Losty & Roy 2012: 28]; c. 1584 [Beach 1978: 134, 149]; c. 1584-85 [Seyller 2011b: 138] ; c. 1584-86 [Verma 2005: 33] ; c. 1584-87 [Verma 2005: 46, 51] ; c. 1584-88 [Verma 1994: 420]) もこの年代を支持する材料である。もちろん *Akbar Nāmah* の例に見られるごとく、挿絵の年代は必ずしも本文の年代以降であるとは限らないので、この二つの歴史書の間にある本文の依存関係はさらに多角的に検討されるべきである。さらに考慮すべきは、後出する記事で、本書 (*Akbar Nāmah* の一部としての「アーイーニ・アクバリ」) が、挿絵を多数備えた作品として *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* を挙げていることである。*Akbar Nāmah* の編纂事業は1591年に始まっており、本書のおおかたは1595-1596年に出来上がっていたはずであるから、*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* が本書の執筆以降に制作されたのでない限り、これほどの豪華写本の存在に本書が触れないのは不可解である (後出する *Ġingiz Nāmah* が *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* のことであるとの説もあるが [Abdul Muqtadir 1927: 44]、これが当たらないことについては注80を見よ)。ことによると *Akbar Nāmah* がティムール朝史という同じジャンルに属する公認の歴史書として編纂されたことは、*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* に対する本書のこのような扱いを説明するかも知れないし、*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* が孤本に留まり、後代に読み継がれる作品になり損ねた事実と整合するかも知れない。いずれにせよ、*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* というティムール朝史が宮廷の書院にすでに存在していたにもかかわらず、1591年にあらたなティムール朝史 *Akbar Nāmah* の編纂が下命されたことの意味は、新たな問題として浮上する。一方、本書で後出する *Zafar Nāmah* の挿絵付き写本が、この *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah* 写本を指している可能性については注81を見よ。(M)

59 この文以下、本訳注136頁5行目までのテキストについては、P. Chandraが1976年の著作の補編に示した英語訳も参考にした [Chandra 1976: 182-184]。(M)

され、月給が加増される。深遠な見識は材料にまで及び、価値は顕現の高みへと至り、彩色 (rang-āmīz) は新たな美を受けとめ、新たな名声が清新さに現れた。甘美な技を備えた匠たちが顔^{かんばせ}を輝かせたのだが、それはたとえば、世間に広まっていたビフザード⁶⁰の稀有な腕前やファラングの人びと⁶¹の魅惑的な仕

60 Kamāl al-Din Bihzād (1535年没)。ティムール朝末期からサファヴィー朝初期にかけて活躍した、イスラーム絵画の巨匠。生年をはじめその生涯には不明な点が多いが、早くに親を失い、ヘラートで書家兼画家の Amīr Rūh Allāh Mirak により養育されたと伝えられる。大画家として知られる Bihzād だが、真筆の作品と確定できるものは多くない。そのなかで彼の初期の作品として広く認められているものに、1488年の記年をもつ Sa'di 著 *Būstān* (注16) の写本 (Cairo: Egyptian National Library General Egyptian Book Organization, Adab Farsi 908) の挿絵がある。この写本は、Sulṭān Ḥusayn Bāyqarā (在位1469-1506) のために著名な書家 Sulṭān 'Alī Maṣḥadī [AA (Jtr.) (8) : 102, n.93] によって書写されたもので、5枚の挿絵を含む。そのうち4枚には Bihzād の署名があり、署名のない1枚についても同じく彼の作品であるとみなされており、少なくともこの写本の製作時には、Bihzād は Ḥusayn Bāyqarā の宮廷に仕えていたものと考えられている。その後、ティムール朝が1506年にウズベクの Šaybānī Ḥān 軍によって滅亡し、ヘラートが1510年にサファヴィー朝の Šāh Ismā'il (在位1501-1524) に征服されてから、Bihzād はサファヴィー朝の都タブリーズに移り、晩年はこの町で暮らした [Bahari 1996: 38-43, 98-100]。ただし、彼がタブリーズに移動した時期については議論がある [Farhad & Brown (EIs)]。Bihzād を宮廷書画院の長に任じた Šāh Ismā'il の勅令があることから、彼が Šāh Ismā'il 治世に既にヘラートを離れていたとする見方もあるが、ヘラート-タブリーズ間の距離や、1530年頃でもまだヘラートにおいて多くの挿絵付き写本が製作されていたことを考慮すると、Bihzād と彼の弟子たちがタブリーズに移ったのは、Šāh Tahmāsp (在位1524-1576) 治世の1529年頃だったのではないとも言われている [Bahari 1997: 248-249; Ettinghausen (EI2); Farhad & Brown (EIs)]。ムガル帝国宮廷における Bihzād への評価としては、まず Bābur が Bihzād は「画家としての仕事をまことに精緻に」行っていたと述べる一方、「しかしひげの無い人物の顔を描くのは下手であった。二重あごをまことに大きく書いていた。ひげのある人物は巧みに顔を描写していた」と評している [BN (Jtr.) : 286]。また、Humāyūn は1535年のグジャラト遠征で失った貴重な蔵書として、とくに Bihzād の挿絵入りの書名を挙げる [AA (Jtr.) (8) : 102-3, n.93]。その後のムガル帝国では、他の画家やその作品について述べる際に、いかに素晴らしいかを示す一種の指標のような形で Bihzād の名が使われた。例えば、Abū al-Faḍl は Daswanth (注64) の作品について、また Ġahāngīr はサファヴィー朝に派遣していた使節 Ḥān 'Ālam が1620年に持ち帰った240点の肖像画について、Bihzād と比べても遜色ないと評することによってそれぞれの水準の高さを示している [AN: III, 434; JN (A) : 285; JN (T) : 323]。ムガル帝国において Bihzād がこのように高く評価された理由としては、ティムール朝の末裔としてその文化的所産を重んじたことや、Humāyūn のサファヴィー朝宮廷での滞在経験が指摘されている [Soucek 1987: 166; Bahari 1997: 232]。 (W)

61 「ファラング」Farang は一般に「ヨーロッパ」を意味するが、本文における「ファラング」は、南アジアに到来していたカトリック諸宗派に対して布教保護権を有したポルトガル王国を意味する。これに後続した英国人およびオランダ人は、ムガル帝国の史料

事に、選りすぐりの同等者が現れたごとくである。仕事の繊細さ、描画の清新さ、手わざの確実さ、そしてその他の選りすぐりの美質が唯一無二の境地を獲得し<I, 117>、不活性の物体が生命力の衣をまとったのである。百人を超える人びとが先導的な地位に達し、高い名声を得た。さらにその境地の近くに到達している一団と、その道半ばを急いでいる一団はあまたある。ヒンドについて、私は何を言えようか。その人びとは上のようなことを想像したことがないのだ

においてそれぞれ *Angriz* (sic. *Angliz* ではない)、*Walandiz* と呼称され、*Farang* とは明確に区別された。本文がいう「ファラングの人びと」の絵画とは主として、ムガル帝国に対する宣教活動の主たる担い手であったイエズス会宣教師たちによってもたらされたキリスト教の聖画像の数々である。その背景にはもちろん、トリエント公会議を経て、カトリックの信仰と宣教において図像が重視されていた状況がある。ゴアから三次にわたってムガル帝国宮廷に来訪したイエズス会の宣教団は、複数の聖画像を持ち込んでおり、これらが君主 *Akbar* を始めとする宮廷人に強い印象を与えたことが本書の記述の背景にある。例えば1580年、第一次宣教団のイエズス宣教師たちは、あてがわれた宿舎の礼拝堂に安置してあったマリア図像やルカ図像に驚嘆した *Akbar* の求めに応じて、その図像を進呈したという [Correia-Afonso 1980: 31, 48] (そのマリア図像の来歴については [MacLagan 1932: 227-228] を見よ)。早くも1580年代にこの種のキリスト教図像をモデルとした絵画を残した宮廷画家 *Basāwan* (注65) や *Kēsaw* (注66) などの例もある [Bailey 1998: 18-25]。とくに1595年5月、ラホールにあった *Akbar* 宮廷に到着した第三次宣教団には、一人のポルトガル人の画家が同行しており [DI: XVII, 70]、図像も合わせて将来されたと思われる点で、それ以前の宣教団よりも大きな影響を帝国宮廷の画壇にもたらした。ただし1595/6年に完成した本書が「ファラングの人びと」の画業に言及する際、この第三次宣教団の事績をも念頭に置いていたか否かは判然としない。いずれにせよ、*Akbar* のみならず王子 *Salim* (後の *Ġahāngir*) も、宣教団が持ち込んだ図像に強い関心を示したことは、第三次宣教団団長 *Jeronimo Xavier* の主導により作成されたペルシア語版イエス伝『真実性の鏡』*Mir'āt al-Quds* の挿絵付き写本など、*Akbar* 時代末期にこの王子の後援のもとで製作された絵画作品から明らかである (これらの絵画のモデルとなったヨーロッパの版画については [Bailey 1998; Carvalho 2012: 49-52] を見よ)。また即位後の *Ġahāngir* 宮廷に聖母子の図像が展示されていたことは、第三次宣教団 *Xavier* の書簡 [Flores 2016: 15, n. 32] や英人旅行者の記録 [Finch: 162] のみならず、帝国王朝史の挿絵 [Beach & Koch 1997: 95, 97] からもうかがえる。ただしキリスト教の図像に対する君主たちの関心は宗教的な信仰の発露ではなく「王室によるプロパガンダの一つの形式」[Bailey 1998: 11] であって、その態度はキリスト教典籍に対しても同様であった [真下 2020]。また宮廷画家たちがモデルとしたヨーロッパの図像資料の一部は1560年代までに到来していた可能性があるとする研究もあるので [Beach 1976: 182-185]、イエズス会宣教団のみにキリスト教図像の来源を帰するべきではない。さらに1596年に巡察師 *Valignano* が日本からイエス像やI. ロロラの肖像画を第三次宣教団に送った例に見られるごとく、キリスト教図像が専らヨーロッパからのみ帝国宮廷に到来したわけではないことにも注意を要する [Bailey 1998: 42, no. 9]。(M)

し、実際のところ世界の各地でもそうした兆しは稀なのだから。

この見識の王道の先行者たちの一人は、タブリーズ地方出身のミール・サイイド・アリー⁶²である。彼は自らの父親から少し学んでいた。敷居に接吻する幸福を得ると、彼は御恩顧の煌めきに照らし出されて、自らの生業において名声を博し、幸運の望みをかちえたのである。

ハージャ・アブド・アッサマド・シーリーンカラム⁶³はシーラーズ出身であ

62 Mir Sayyid 'Alī. 'Abd al-Ṣamad (注63) とともに1549年、Humāyūnのもとに参じたイラン出身の画家 [THA: 65-69, 177; AA: I, 292]。師は父 Ṣāh Maṣṣūr である [GH: 139-140]。故地は Tirmid であり、育ったのは Tabriz であるとの記録がある [NM: 51v; AA: I, 254]。Akbar 時代においても活動し、とくにその治世の初頭から始まった Qīṣṣah-i Amīr Ḥamzah (注79) の挿絵付き写本の製作事業に50人の画家を率いて「7年にわたり」従事したが、その半ばにしてメッカ巡礼へ向かい、聖地で死去したという。詩人としても活動し、詩人列伝では Ġudā'i の雅号で言及される [NM: 51v-52r; HI: II, 93; TA: II, 504; MT: III, 211; AN: II, 42; RT: 574v; ArAsh: V, 2954]。Verma によれば13点の絵画がこの画家に帰されるが、その中には帰属の疑わしいものも含まれているという [Verma 1994: 277-280]。(M)

63 Ḥwāḡah 'Abd al-Ṣamad Ṣīrin-qalam. 1505年-1515年頃に生まれた画家。サファヴィー朝宮廷で活動していたが、イランに亡命してきたムガル帝国君主 Humāyūn の招請を受け、1549年、Mir Sayyid 'Alī (注62) とともに当時カーブルにいたこの君主の下に参じた [THA: 65-66; AN: I, 220, 292]。「甘美な筆」Ṣīrin-qalam という雅号はこの時代から用いていた [THA: 68-69; JN (T): 10]。また王子時代の少年 Akbar には作画の教授も行った [JN (T): 24] (Akbar Nāmah にはやや力点の異なる記述がある [AN: II, 42-43])。Akbar 治世には君命によって Mir Sayyid 'Alī が手がけていた『ハムザ物語』(注79)の挿絵群の製作事業を完成させた [NM: 52r]。Akbar 時代末期に死去するまで (1600年-1605年頃)、『Abd al-Ṣamad は弟子たちを育成するとともに(その一人が本書の記事に後続する Daswant である)、イラン流の様式にインド流の要素を加えた画風を確立していった。一方、画業とは別に複数の公職も歴任し (1577年、首都 Faṭhpūr 所在の貨幣打刻所の監督 [AN: III, 227]。1582年、御用の革製品調達の見査役 [AN: III, 396]。1583年、王子 Murād の補佐役 [AN: III, 404]。1586年、ムルターン州財務官 [AN: III, 511])、本書執筆時 (1595/6年) にはマンサブ400のマンサブダールでもあった [AA: I, 228]。なお息子の Muḥammad Ṣarīf は Akbar 時代に書道と画業によって知られており、Fārsī という雅号の詩人でもあったが [TA: II, 512; MT: III, 310-312]、マンサブ200のマンサブダールでもあった [AA: I, 230]。この息子の人生は、帝国宮廷における画家の生き方の例として注意に値する。すなわち彼は王子 Salīm の幼少時からともに成長した近臣であり、ウズク印を預かるほどの間柄であったという。Akbar 治世末期に王子が反乱を起こすとこれに従った。そのため王子が Ġahāngīr として即位した後はマンサブ5000ザト 5000 サヴァールという破格の昇進によって遇され Amīr al-Umarā' の称号を得た [TM: 180v; TKHj: 666; AAB: 55v; ArAsh: IV, 2216; JN (T): 9-10, 12; DhKh: II, 186; MU: II, 625]。このような華々しい経歴にもかかわらず、伝存する画業は Verma によれば Akbar 時代のもの9点に過ぎず、Ġahāngīr 時代1612年に死去するまでの画業については定かでない [Verma 1994: 299-301]。'Abd al-Ṣamad に関する美術史的説明としては [Verma 1994:

る。彼は随従の時よりも前からこの技芸を知っていたけれども、王中の王の御鑑識という妙薬によって、高い地位を得た。彼の絵は内実へと向かうものであった。同師の弟子たちはその教えによって頭角を現した。

ダスワント⁶⁴は興持ちの息子である。彼はこの宮内作業所で過ごし、壁に絵画を描くことに没頭していたものだった。ある日、それが王中の王の深慮ある御天覧にかかったところ、内実に対する画匠の洞察を感得なさり、ハージャ【・アブド・アッサマド】にお預けになったのである。彼はわずかの期間で当代随一の者となり、時代の逸材となった。【しかし】漆黒の暗がり、彼の知性を覆い隠し、彼は自らを傷つけて、無への旅を選んだ。すばらしい仕事の数々が彼の形見である。

バサーワン⁶⁵は、素描、肖像画、彩色、似絵およびこの技芸におけるその他の仕事にかけて、当代随一の者となった。そして物の分かった見識者たちの多くは彼をダスワントよりも優れていると評価する。

40-46; Canby 2011; Eftekhar & Lahouti Elsl: 'Abd al-Šamad Shirāzi] を見よ。(M)

⁶⁴ Daswanth. 諸写本はいずれも qahhār-pisar 「強者の息子」とするが [AA Ms. A: 50v; AA Ms. B: 55r; AA Ms. C: 44r]、これでは意味をなしがたいので、底本の kahār-pisar というテキストを採った。Daswant / Daswanth が興持ちの子 kahār-pisar であったこと、および 1584 年に短剣によって自死を遂げたことについては Akbar Nāmah に記事がある [AN: III, 436]。その画業は、『鸚鵡の書』Ṭūṭī Nāmah (Badā'un で多数の著作をものした Naḥṣabī (1350/1 年没) がサンスクリット語の説話集『鸚鵡七十話』Śukasaptati をペルシア語に翻訳したもの) の写本挿絵に始まり、前出の Mahābhārata ペルシア語訳たる Razm Nāmah の写本挿絵を数多く手がけたことについては [Das 2004: 67, 79-80, n. 6]。さらにその業績の多くを、工房の分業における彩色 ('amal) よりも下絵 (tarḥ) が占めていたことは、この画家に帰される可能性のある絵画 30 点を Verma がまとめた一覧から分る [Verma 1994: 123-126]。また Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah 写本に、1584 年に死去したこの画家の関与した挿絵が含まれていることは、その製作年代を限定する材料の一つである。(M)

⁶⁵ Basāwan. Akbar 時代に活動した画家で、Verma によれば同人に帰される可能性のある絵画は 137 点にのぼる [Verma 1994: 83-94]。関与した写本挿絵は Ṭūṭī Nāmah に始まり、Qīṣṣah-i Amīr Ḥamzah、Razm Nāmah、Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah、Rāmāyan (1598/9 年)、『ダーラープの書』Dārāb Nāmah (1588 年)、Nizāmī の Ḥamsah、『集史』Ġāmi' al-Tawārīḥ、Anwār-i Suhaylī、Bābur Nāmah、Akbar Nāmah にそれぞれ付された挿絵など Akbar 治世末期にかけて製作されたものまで数多い。また下絵、彩色のいずれもこなしているし、Akbar 宮廷に持ち込まれていた欧州の絵画に取材した作品もある。この画家の様式について詳しくは [Seyller 2011a] を見よ。息子の Manōhar も画家として、Akbar 時代から Ḡahāngīr 時代にかけて活動した。(M)

またケーサヴ⁶⁶、ラアル⁶⁷、ムクンド⁶⁸、ムシュキーン⁶⁹、ファッルヒ・カルマ

- 66 Kēsaw. Akbar時代に活動した画家。絵画の銘記では Kēšaw Dās や Kēšaw Kalān との表記もみられる一方、研究文献では Kesu あるいは Kesav とも表記される。Kēsaw ないし Kēšaw を号した画家は他にも Akbar 時代にいたため、人物と作品の特定には難しい問題も残る [Okada 2011: 156]。Verma は Kesav [Verma 1994: 203-206]、Kesav Kalān [do.: 206-210]、Kesav Khwurd [do.: 210-211]、Kesavdās [do.: 212-214]、Kesav Gujarātī [do.: 214]、Kesav Kahār [do.: 214-215] と細かく分けて立項している。帰属の確実な作品から判断する限り、Kēsaw は 1570 年代から活動し、晩年には Akbar に反乱した王子 Salim (後の Ġahāngīr) が Ilāhābād に構えた宮廷のアトリエに所属して活動したと考えられる。Akbar 宮廷に持ち込まれていた欧州の版画をモデルとしながら、独自の様式に及んだ絵画を複数残した点は、同時代の他の画家に比して際立つ特徴であるという。詳しくは [Okada 2011] を見よ。(M)
- 67 La'l. Akbar時代に活動した画家で、Verma によれば同人に帰される可能性のある絵画は 137 点にのぼる。絵画の銘記では Lāl との表記も見られるが、同一人物である。近代インド語においては La'l と Lāl は同じ発音であり、ウルドゥー語における文字表記では前者を後者で代用することもある [Platts 1884: 946a]。この画家の関与は Razm Nāmah を初めとして、Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah、Rāmāyan、Nizāmi of the Ḥamsah、Ġāmi' al-Tawārīḥ、Anwār-i Suhaylī、Bābur Nāmah、Amīr Ḥusraw of the Ḥamsah、Akbar Nāmah など多数の写本の挿絵に及んでおり、その業績の多くは下絵である [Verma 1994: 221-231]。(M)
- 68 Mukund. Akbar時代に活動した画家で、Verma によれば同人に帰される可能性のある絵画は 53 点ある。Razm Nāmah を初めとして、Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah、Nizāmi of the Ḥamsah、Rāmāyan、Anwār-i Suhaylī、Bābur Nāmah、Akbar Nāmah などに挿絵を製作している。分業においてこの画家は下絵と彩色のいずれをも担当したが、単独の作品も数多い [Verma 1994: 304-308]。(M)
- 69 Muškin. Akbar時代から Ġahāngīr時代にかけて活動した画家である。「じゃ香が香るもの」という意味をなすこの語形は、公刊本および写本のいずれも同じ。しかし絵画の銘記においては Miskīn 「貧窮者」の語形で現れ、研究文献は後者をとる。また絵画の銘記には Miskīnā なる名も見られるが、Verma がこれを Miskīn とは別人と見なす一方、Brand はこれを退けており、美術史家の大勢は後者に従う [Verma 1994: 282; Brand 2011: 171]。Miskīn および Miskīnā の画業は、Verma の調査をもとにまとめれば、Razm Nāmah を初めとして、Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah、Rāmāyan、Anwār-i Suhaylī、Ġāmi' al-Tawārīḥ、Bābur Nāmah、Akbar Nāmah などの写本製作に関与した。父は Akbar 時代に活動した画家 Mahēs であり [Brand 2011: 167]、兄弟の 'Aṣī も画家として Akbar 時代に活動した [Verma 1994: 69-70]。(M)

ク⁷⁰、マードヴ⁷¹、ジャガン⁷²、マヘース⁷³、ケーム・カラン⁷⁴、ターラー⁷⁵、サーンワ

- 70 Farruḥ-i Qalmāq. 文献資料にも伝存する絵画の銘記にもこの名を有する画家は見当たらない。但し Akbar 時代に活動した画家としては、Farruḥ, Farruḥ Kalān, Farruḥ Ḥwurd, Farruḥ Beg, Farruḥ Čelah, Farruḥ Ḥusayn が知られており、Farruḥ-i Qalmāq がこのうちのいずれかと同一人物である可能性はある [Verma 1994: 144-155]。Beveridge は、Farruḥ-i Qalmāq が Farruḥ Beg が同じかもしれないと示唆しており、Verma もそれに従っている [AN (Etr.) : III, 714, n. 1; Verma 1994: 147]。 (M)
- 71 Mādḥaw. Akbar 時代から Ġahāngir 時代にかけて活動した画家である。Verma は同人に帰される可能性のある絵画を 40 点挙げており、それには *Razm Nāmah* を初めとして、*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah*, *Nizāmī* の *Ḥamsah*, *Anwār-i Suhaylī*, *Ġāmi' al-Tawārīḥ*, *Bābur Nāmah*, *Akbar Nāmah*, 『親交の息吹』 *Nafahāt al-Uns* などの写本挿絵が含まれる [Verma 1994: 234-238]。Ġahāngir 時代には 'Abd al-Rahīm Ḥan-i Ḥanān が抱えた書院に所属していたが [MR: III, 1682]、活動の内容は不明である。 (M)
- 72 Ġagan. Akbar 時代に活動した画家である。Akbar 時代に活動した画家として銘記を残す Ġagannāth とこの画家が同一人物である可能性もあるが、Verma は Ġagannāth が専ら単独作を製作したのに対して、Ġagan が共同製作を主とし、下絵を多く手がけたことを根拠に、両者が別人であると考えている。Verma は Ġagan に 35 点の絵画 (*Razm Nāmah* を初めとして、*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah*, *Rāmāyan*, *Dārāb Nāmah*, *Akbar Nāmah* などの写本挿絵) を帰しているが、そのうち 1 点を様式上、Ġahāngir 時代に属するものと見ている [Verma 1994: 189-192]。 (M)
- 73 Mahēs. Akbar 時代に活動した画家。Mahēs と同じであり、絵画の銘記においても、研究文献においても後者の表記が通用している。Verma は同人に帰される可能性のある絵画を 38 点挙げており、それらには *Razm Nāmah* を初めとして、*Rāmāyan*, *Dārāb Nāmah*, 『被造物の驚異』 *'Ağā'ib al-Maḥlūqāt*, *Ġāmi' al-Tawārīḥ*, *Anwār-i Suhaylī*, *Bābur Nāmah*, *Akbar Nāmah* などの写本挿絵が含まれる [Verma 1994: 241-244]。 (M)
- 74 Khem Karan. Akbar 時代に活動した画家。Verma は同人に帰される可能性のある絵画を 32 点挙げており、それらには *Razm Nāmah* を初めとして、*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah*, *Rāmāyan*, *Ġāmi' al-Tawārīḥ*, *Bābur Nāmah*, *Akbar Nāmah*, *Nafahāt al-Uns* などの写本挿絵が含まれる [Verma 1994: 216-219]。 (M)
- 75 Tārā. Verma は同人に帰される可能性のある絵画を 16 点挙げており、それらには *Tūṭī Nāmah* を初めとして、*Razm Nāmah*, *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah*, *Dārāb Nāmah*, *Rāmāyan*, *Nizāmī* の *Ḥamsah*, *Ġāmi' al-Tawārīḥ* などの写本挿絵が含まれる [Verma 1994: 363-364]。また現存する *Rāmāyan* などの絵画の銘記からは Tārā Kalān なる画家の存在がうかがわれるが、これは別人物であるという [Verma 1994: 364-365]。 (M)

ラー⁷⁶、ハルバンス⁷⁷、ラーム⁷⁸は名声ある者たちの中でも逸材である。もし一人ずつの仕事を書べれば、説明は長くなってしまふであらう。おのおのの庭から一輪ずつの花を摘んでくる、刈穂の山それぞれから一本ずつの穂を拾ってくる【ようなものである】。

注意すべきは、心地よい情眠のもとである外貌の観察や図像の製作についての豊かな思索から、見識の丹葉や、無明の救い無き痛みにくく特効薬が生まれる、ということである。描写を目の敵にする因習の輩にとっては、真理を見る目が開かれたのである。ある日、幸運なる者たちが拝謁の恩沢を手にした密議の会合において、神聖なる御口から語られたのはつぎのようなことであった。「一部の者たちはこのなりわいを非難する。堪えがたいことである。思うに、神を知ることにについて絵師は、他の多くの者よりも秀でているところがある。というのも彼は命あるものを描き、肢体をそれぞれ写しとるのだが、それとて魂を宿したのものにはならぬゆえ、その度ごとに、生命を創造する御方の神業を正当に評価し、認識するからである」。

この技芸が高い地位を得たのと同様に、すばらしい仕事の数々が登場してきた。ペルシア語の韻文・散文の書物に装飾がほどこされ、心開くような場面の数々が描写されたのである。『ハムザ物語』(*Qiṣṣah-i Ḥamzah*)⁷⁹は十二冊に構成

76 Sānwalah. Akbar時代に活動した画家。Vermaは同人に帰される可能性のある絵画を32点挙げており、それらにはハーフィズḤafīẓの『詩集』*Diwān*、*Razm Nāmah*、*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Tīmūriyyah*、*Rāmāyan*、*Dārāb Nāmah*、*Nizāmī*の*Ḥamsah*、*Anwār-i Suhaylī*、*Gāmi' al-Tawārīḥ*、*Amir Ḥusraw*の*Ḥamsah*、*Bābur Nāmah*、*Akbar Nāmah*などの写本挿絵が含まれる [Verma 1994: 342-345]。(M)

77 Harbans. Vermaによればこの画家に帰される可能性のある絵画は王子Salimの主導のもとNizām Pānīpatīが作成した『ヨーガヴァシシュタ』ペルシア語訳*Ġog Bāṣišt* (1603年)に属する挿絵1点のみである [Verma 1994: 170]。(M)

78 Rām. Vermaによればこの画家に帰される可能性のある絵画は知られていない [Verma 1994: 336]。Vermaは、本書が指す画家がAkbar時代からĠahāngīr時代にかけて活動したRāmdāsである可能性を示唆している [Verma 1994: 336-338]。(M)

79 ムガル帝国の史料では*Qiṣṣah-i Amir Ḥamzah*『アミール・ハムザ物語』というタイトルで言及されることが多い。これは預言者Muḥammadの父方のおじḤamzah b. 'Abd al-Muṭṭalibに仮託した物語集である。歴史上のḤamzahはウフドの戦いで戦死を遂げたが、この物語集はḤamzahを主人公とする冒険物語として、ペルシアの様々な説話の要素を吸収しつつ発展した。ペルシア語のみならず、アラビア語、ウルドゥー語、トル

され、彩色をほどこされ、魅惑的な手わざの絵師たちが千四百箇所に、読者のための驚異を仕込んだ。<I, 118> 彼らは『チンギズの書』(*Čingiz Nāmah*)⁸⁰、『勝利

コ語、グルジア語、マレー語など、諸言語のバージョンがある。ペルシア語のバージョンは少なくとも三種類が知られているが、その内容にはかなりの相違がある。Akbar 宮廷で製作された『ハムザ物語』の挿絵付き写本は、葉の多くが散逸して伝世していることも加わって、そのテキストの原型や起源を特定することは難しい。本文が「1400点」にものぼったと伝えるその挿絵のうち、今日伝存しているのは、米国の研究者サイラーによれば178点に留まるという [Seyller 2002: 256-279]。文献資料および現存写本・挿絵の徹底的な調査に基づいてサイラーが結論したところは、『アミール・ハムザ物語』挿絵入り写本は、1557年半ばごろから1572/3年までの間にわたって製作され全14冊で完成したこと、挿絵が大型のサイズ(短辺でさえ50センチを上回る)であり、製本された形跡もないことから、君主Akbarをはじめとする宮廷人に対して上演された朗読に併せて挿絵が用いられたと考えられること、である [Seyller 2002: 32-43]。Akbar Nāmah には1564年、Akbarが『アミール・ハムザ物語』を随臣とともに「聴いた」との記録があるし、Badā'unīはAkbarがこの物語集のみならず、*Šāh Nāmah*のほか、「*Qīṣṣah-i Abū Muslim*や*Ġāmi' al-Hikāyāt*など」を「くりかえし聴いた」と伝えている [AN: II, 223; MT: II, 320]。挿絵の製作プロジェクトを当初監修したのは画家Mir Sayyid 'Alīであるが、1564/5年頃、同人が「巡礼への辞去の許し」を得たことに伴い、'Abd al-Ṣamad (注63) が引き継いだ [NM: 52r]。また物語のテキストの書写に従事した書家たちのうちMir Ḥusayn Kulangī, Maḥmūd-i Ishāq, Mawlānā Dūrī, Muḥammad Amin Maṣḥadīについては [AA (Jtr.) (8): 110, n. 107; 115-117, n. 129, n. 130, n. 132] を見よ。なお物語のテキストの作者をḤwāḡah 'Aṭā' Allāh Munṣī Qazwīnīに帰する所伝があるが、この人物の詳細は不明であり、この問題に立ち入ることは難しい [NM: 52r]。 (M)

80 Raṣīd al-Dīnが著した*Ġāmi' al-Tawārīḥ*のうち、第一巻のモンゴル民族史『ガザン史』を指したものである。Akbar 宮廷のアトリエで製作された『ガザン史』の写本は今日、98点の挿絵を備えた状態でゴレスターン宮殿図書館(テヘラン)に所蔵されている [Marek & Knížková: 1963; Verma 1994: 418; 白岩 2000: 19]。かつては『チンギズの書』をKhuda Bakhsh Oriental Public Library所蔵の孤本*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah*と見なす案もあったが [Abdul Muqtadir 1921: 44]、これは上記*Ġāmi' al-Tawārīḥ*写本の存在を踏まえない前提に基づいており、注80にも述べたごとく*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah*はČingiz Ḥānの事績に関する記事を含まないのだから、この比定は成り立たない。 (M)

の書』(*Ẓafar Nāmah*)⁸¹そして本書⁸²、さらに『戦の書』⁸³、『ラーマーヤナ』⁸⁴、『ナ

81 Šaraf al-Dīn 'Alī Yazdīが執筆したTimūrの一代記を指す。注3、7、17に述べたごとく、この書物はムガル帝国の王族や宮廷人に広く読まれた歴史書であって、多数の写本がムガル帝国において製作されたはずである。実際、帝国の書庫にはティムール朝時代に製作された同書の写本も蔵され、それには歴代君主の閲読に供された出納記録が書き付けられている (Johns Hopkins 大学図書館所蔵) [真下 2014: 288-291]。しかし本書が述べるような、Akbar時代に製作された挿絵を備える *Ẓafar Nāmah* の写本は、British Libraryに蔵される1点 (Or. 1052) が知られるのみである。この写本もわずか7点の挿絵を備えるに過ぎず、本書が列挙するその他の作品の豪華写本に比すると明らかに規模が異なる事から、ここでいわれる *Ẓafar Nāmah* の挿絵付き写本がこの British Library 写本を指すというのは考え難い。むしろ考慮すべきは、注81に述べたごとく、ここで本書が指しているのが、著者不明・原題不明の孤本 *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah* 写本である可能性である。確かに注81に述べたごとく、*Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah* のテキストはTimūrの事績についてさえ、Yazdīの *Ẓafar Nāmah* ではなく *Tārīḥ-i Alfi* のテキストに忠実に一致している。それでも *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah* は自らの情報源として *Ẓafar Nāmah* を特記しているという [Abdul Muqtadir 1921: 41]。さらに Seyller の調査によれば「ここに記入されているのはすべて *Ẓafar Nāmah* である」という旨の注記が写本に書き込まれているという [Seyller 1997: 309]。この注記の記入者も年代も Seyller の記述からは定かでないが、王朝の始祖Timūrの事績から説き起こされる *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah* がその内容やテキストの起源とは別に、ムガル帝国宮廷の当事者にとって *Ẓafar Nāmah* と呼ばれ得た可能性は念頭に置いてよいだろう。(M)

82 「本書」は *Akbar Nāmah* を指す。いわゆる「アーイーニ・アクバリ」は後代の俗称に過ぎず、著者 Abū al-Faḍl の構想において、その部分が *Akbar Nāmah* を構成する一部であったことについては [AA (Jtr.) (1) : 76-77] を見よ。実際、挿絵を多数備えた「アーイーニ・アクバリ」写本は知られていないので、「本書」の写本とは、Akbar時代に製作され、Victoria and Albert Museum や Chester Beatty Library などに所蔵される *Akbar Nāmah* の挿絵付き写本を指すはずである。(M)

83 Akbar時代に製作された *Razm Nāmah* の写本挿絵は、Maharaja Sawai Man Singh II Museum にまわって伝世する1588年の写本に付属する169点の他、British Library 所蔵の1598年の写本に付属する24点、State Museum and Picture Gallery, Baroda 所蔵の1598年の写本に付属する32点、Birla Academy of Art and Culture 所蔵の48点 (1600-5年頃) など、多数ある [Verma 1994: 419]。

84 Akbar時代に製作された *Rāmāyan* の挿絵付き写本のうち1588年に製作された写本 (Maharaja Sawai Singh II Museum, Jaipur 所蔵) については [Das 1987: 94-102; Seyller 1997: 308-309]。

ル・ダマン』⁸⁵、『カリラとディムナ』⁸⁶、『知識の試金石』⁸⁷などを挿絵によって飾り、描写すべき場所を自ら定めたのである⁸⁸。

至高の命令により、絵師たちは、この永遠の王朝の随臣たち全員の姿を描写し、一点の巨冊に仕上げた⁸⁹。【絵画に姿が留められることで】過去の人びとは

⁸⁵ Akbar時代に製作された挿絵を備えた *Nal Daman* の写本は知られていない。(M)

⁸⁶ Akbar時代に製作された挿絵を備えた *Kalilah wa Dimnah* の写本は現存例が知られていない。一方 *Anwār Suhaylī* については School of Oriental and African Studies に所蔵される写本 (1570 年製作。この年代については注 51 も参照) のほか、Bharat Kala Bhavan (Banaras Hindu University) にも Akbar 宮廷で製作された挿絵付き写本が伝存している [Seyller 1986; Grube (ed.) 1991; Natif 2008]。このように本書執筆時点で存在していたはずの *Anwār Suhaylī* の挿絵付き写本が言及されない理由は不明である。ことによると、*Anwār Suhaylī* の文体を改めた決定版として *‘Iyār-i Dāniš* が執筆されたという事情によるのかもしれない (注 52)。(M)

⁸⁷ Akbar 時代に製作された *‘Iyār-i Dāniš* の挿絵付き写本は、Chester Beatty Library、および Chhatrapati Shivaji Maharaj Vastu Sangrahalaya (旧 Prince of Wales Museum of Western India) に伝存しているが、いずれも 1600 年頃の製作とされているので、1595/6 年に成立した本書が指しているのは、現存しない別の写本であることになる [Verma 1994: 418]。(M)

⁸⁸ 「描写すべき場所を自ら定めたのである」の文を Blochmann は “His Majesty himself sat for his likeness” と訳しているが従わない [AA (Etr) : I, 115]。Chandra は本訳と同じ解釈をとり “... His Majesty himself having indicated the scenes to be painted” と訳している [Chandra 1976: 184]。なお本書成立の時期 (1595/6 年) までに製作されたにもかかわらず、本書が言及していない挿絵付き写本が多数ある。そのうちまとまった分量が伝世しているものを以下に示す。年代は特に記さない限り、[Verma 1994: 417-420] が示す製作年代に従う。*Anwār-i Suhaylī* (School of Oriental and African Studies (1570)), *Ṭūṭī Nāmāh* (Cleveland Museum of Art (c. 1570-1575); Chester Beatty Library (c. 1580)), *Kitāb-i Sā‘at* (Rampur Raza Library (c. 1570); H. Kevorkian Collection (1583)), *‘Ağā‘ib al-Maḥlūqāt* (Chester Beatty Library (c. 1575-1600)), Ḥāfiẓ の *Diwān* (Rampur Raza Library (c. 1582-1585)), *Tārīḥ-i Ḥāndān-i Timūriyyah* (c. 1584-1588) (注 58、81)、Nizāmī の *Ḥamsah* (Keir Collection (c. 1585-1590)), Anwārī の *Diwān* (Fogg Art Museum (1588. Verma の AH 988 (AD 1580) という記述は誤り)、*Dārāb Nāmāh* (British Library (c. 1588)), Sa‘dī の *Gulistān* (British Library (c. 1590))。(M)

⁸⁹ Akbar 宮廷の貴族たちの肖像画を集めた画冊は現存していない。美術史研究の知見に従えば、ムガル帝国の絵画のジャンルとして肖像画が発展したのは Ḡāhāngīr 時代以降のことであり、このことはムラッカ (書画帖) に収録されて伝世した、君主、王族、貴族といった実在の人物の肖像画からうかがえる。肖像画の発展の要因を、イエズス会宣教師などによって持ち込まれた欧州の絵画や版画に求める説が有力だが (最近のものでは例えば [Koch 2018])、ティムール朝絵画における人物描写の伝統が継承されていた可能性をも考慮すべきとする説もある [Parodi 2018]。また Akbar と Ḡāhāngīr が行ったいわゆる *Dīn-i Ilāhī* の儀礼の一環として家臣に下されたターバン留め具 (*ṣašt*) は君主の「似絵 (*ṣabih*)」を備えていたが [AA: I, 158; MT: II, 338; AAB (H) : 26r-27r; JN (T) : 35-36;], Ḡāhāngīr に帰されるその事例は君主の胸像を刻したメダル状の記念

新たな命を得て、現在の人びとは永遠の生命を得た。

絵師たちに高い地位が与えられたのと同様に、装飾師、金箔師、匡郭師、製本師にも活況が生まれた。そしてこの宮内作業所での御奉仕によって、数多くのマンサブダールたち、アハディーたち、その他の騎兵たちが拔擢の榮譽を獲得した。歩兵の手当は1200ダームより多く、60ダーム⁹⁰を下回ることはない。

参考文献：

一次資料

- AA (Etr.): H. Blochmann (vol. 1) & H. S. Jarrett (vols. 2, 3) (trs.). (Rev. ed. D. C. Phillott & J. Sarkar), Calcutta, 3 vols., 1927-1949.
- AA (Jtr.) (2) : 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (2)」『紀要 (神戸大学文学部)』41, 2014, pp. 75-120.
- AA (Jtr.) (3) : 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (3)」『紀要 (神戸大学文学部)』42, 2015, pp. 113-151.
- AA (Jtr.) (5) : 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (5)」『紀要 (神戸大学文学部)』44, 2017, pp. 49-88.
- AA (Jtr.) (8) : 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (8)」『紀要 (神戸大学文学部)』47, 2020, pp. 81-128.
- AA Ms. A: Ms. Add. 7652, British Library.
- AA Ms. B: Ms. Or. 2169, British Library.
- AA Ms. C: Ms. Add. 6552, British Library.
- AAB: Asad Beg Qazwīnī, *Aḥwāl-i Asad Beg*. Chander Shekhar (ed.), New Delhi, 2017.
- AAB (H): do. Ms. Fann-i Sawānīḥ-i 'Umri 41, Andhra Pradesh Government Oriental Manuscripts Library and Research Institute.
- AlmN: Muḥammad Kāẓim, *Ālamgīr Nāmah*, Ḥādīm Ḥusayn & 'Abd al-Ḥayy (eds.), Calcutta, 1865-1868.
- AN: Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmah*. Mawlawī Āghā Aḥmad 'Alī & Mawlawī 'Abd al-Raḥīm

金貨である [Hodivala 1923: 147-170]。Lostyはこのような胸像金貨の起源として、ルネサンス時代の欧州で流行していた胸像付きのコイン、メダル、カメオがムガル帝国に持ち込まれていた可能性を示唆している [Losty 2013: 52-57]。もしこれが成り立つなら、欧州の図像資料のみならず工芸品もムガル帝国の肖像画の展開に影響したことになる。 (M)

⁹⁰ 底本は「600ダーム」*šīš šad dām*とするが、諸写本はいずれも「60ダーム」*šašt dām*とする [AA Ms. A: 50v; AA Ms. B: 55v; AA Ms. C: 44v]。ここでは後者を選った。 (M)

- (eds.), 3 vols., Calcutta, 1877-1886.
- AN (Etr.): do. H. Beveridge (tr.), 3 vols., Calcutta, 1902-1939.
- ArAsh: Taqī Awhādī, *‘Arafāt al-‘Āṣiqīn wa ‘Araṣāt al-‘Ārifīn*. Sayyid Muḥsin Nāḡi Naṣrābādī (ed.), 8 vols., Tihirān, 1388 Sh.
- BM: Sayyid ‘Alī Ṭabāṭabā, *Burhān-i Ma’āṭir*. Sayyid Hāshimī (ed.), Ḥaydarābād: Maḡlis-i Maḥṭūṭāt-i Fārsiyyah, 1936.
- BN (Jtr): Bābur, *Bābur Nāmah*. 間野英二訳『バーブル・ナーマの研究 III 訳注』松香堂, 1998.
- BNL: ‘Abd al-Ḥamīd Lāhawrī, *Bādšāh-Nāmah*. Kabīr al-Dīn Aḥmad & ‘Abd al-Raḥīm (eds.), 2 vols., Calcutta, 1866-1868.
- BNQ: Muḥammad Amin Qazwīnī, *Bādšāh-Nāmah*. Ms. British Library, Or. 173.
- ChCh: Čandar Bhān Brahman, *Čahār Čaman*. Sayyid Muḥammad Yūsuf Ča’farī (ed.), Dihli-i Naw, 2007.
- DGHK: Amīr Ḥusraw, *Dibāčah-i Ġurraṭ al-Kamāl*. S. W. al-Ḥ. ‘Ābidī (ed.), Lāhawr, 1975.
- DhKh: Farīd Bhakkārī, *Daḡīrat al-Ḥawānīn*. Syed Moinul Haq (ed.), 3 vols., Karachi, 1961-1974.
- DI: J. Wicki (ed.), *Documenta Indica*, 18 vols., Roma, 1948-1988.
- FS: Iṣāmī, *Futūḥ al-Salāṭīn*. A. S. Usha (ed.), Madras, 1948.
- GH: Qāḍī Aḥmad Qummī, *Gulistān-i Hunar*. Aḥmad Suhaylī Ḥwānsārī (ed.), Tihirān, 1352 Sh.
- Gulzar (P): Muḥammad Ġawṭ Šaṭṭārī, *Gulzār-i Abrār*, Muḥammad Zakī (ed.), Patna, 1994.
- Gulzar (T): Muḥammad Ġawṭ Šaṭṭārī, *Gulzār-i Abrār*, Yūsuf Big Bābāpūr (ed.), Tihirān, 1391 Sh/ 2012.
- HI: Amin Aḥmad Rāzī, *Haft Iqlīm*. Ġawād Fāḍil (ed.), 3 vols., Tihirān, n.d.
- IAF: ‘Abd al-Šamad, *Inšā-yi Abū al-Faḍl*. Lakhna’ū, 1280 A.H.
- ID: Abū al-Faḍl, *‘Iyār-i Dāniš*. Kānpūr, 1879.
- JN (A): Nūr al-dīn Muḥammad Ġahāngīr, *Ġahāngīr Nāmah*. Syud Ahmud Khan (ed.), Ghazeepore & Ally Gurh, 1863-64.
- JN (T): do. Muḥammad Hāshim (ed.), Tihirān, 1359 Sh.
- Lilavati: Abū al-Fayḍ Fayḍī, *Lilāwatī*. Anonym. (ed.), Calcutta, 1827.
- MaBh: *Mahābhārat*. Sayyid Muḥammad Riḍā Ġalālī Nā’inī & N. S. Šūklā (eds.), 4 vols., Tihirān, 1358-1359 Sh.
- MAf: Anonym, *Maḡma’ al-Afkār*. Chander Shekar (ed.), 2 vols., New Delhi, 2016.
- MAhmadī: ‘Alī Muḥammad Ḥān, *Mir’āt-i Aḥmadī* 2 vols., Syed Nawab Ali (ed.), Baroda, 1927-1928.
- MAI: Mustā’idd Ḥān, *Ma’āṭir-i ‘Ālamgīrī*. Āḡā Aḥmad ‘Alī (ed.), Calcutta, 1870-1873.
- MJ: ‘Abd al-Sattār, *Majālīs-i Jahāngīrī*. ‘Arīf Nawshāhī & Mu’in Nizāmī (eds.), Tihirān, 1358

Sh. (2006).

MMum: Nūr al-Dīn Šūstārī. *Majālis al-Mu'minīn* 2 vols., Tihirān, 1365 Sh.

MR: 'Abd al-Bāqī Nihāwandī, *Ma'ātir-i Raḥīmī*. Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (ed.), 3 vols., Calcutta, 1910-1931.

MT: 'Abd al-Qādir Badā'unī, *Muntaḥab al-Tawārīḥ*. M. A. 'Alī & Kabīr al-Dīn Aḥmad (eds.), 3 vols., Calcutta, 1864-1869.

MT (Etr.): do. G. S. A. Ranking, W. H. Lowe & T. W. Haig (trs.), 3 vols., Calcutta, 1884-1925.

MU: Šāh Nawāz Ḥān, *Ma'ātir al-Umarā'*. Mawlawī 'Abd al-Raḥīm & Ašraf 'Alī (eds.), 3 vols., Calcutta, 1887-1891.

NM: 'Alā' al-Dawlah Qazwīnī, *Nafā'is al-Ma'ātir*. Ms. Maulana Azad Library (Aligarh Muslim University), Subhan Allah 920/45.

RI: Maḥmūd Gāwān, *Riyāḍ al-Inšā'*. Šayḥ Čānd b. Ḥusayn & Ġulām Yazdānī (eds.), Ḥaydarābād, 1948.

RT: Ṭāhir Muḥammad Sabzawārī, *Rawḍat al-Ṭāhirīn*. Ms. British Library, Or. 168.

SA: Amīr Ḥurd, *Siyar al-Awliyā'*. Delhi, 1302.

TA: Nizām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī*. B. De & Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (eds.), 3 vols., Calcutta, 1913-1941.

TAlf: Aḥmad Tattawī et al., *Tārīḥ-i Alfī*. Ġulām-Riḍā Ṭabāṭabāyī Mağd (ed.), 8 vols., Tihirān, 1382 Sh.

TAlf (IO MS): do. Ms. British Library, IO Islamic 3293.

TFSB: Ḍiyā' al-Dīn Baranī, *Tārīḥ-i Firūz Šāhī*. S. A. Khan (ed.), Calcutta, 1862.

THA: Bāyazīd Bayāt, *Taḍkirah-i Humāyūn wa Akbar*. Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (ed.), Calcutta, 1941.

TKhJ: Ḥwāḡah Ni'mat Allāh, *Tārīḥ-i Ḥān Ġahānī wa Maḥzan-i Afḡānī*. Saiyid Muhammad Imam al-Dīn (ed.), 2 vols., Dhaka, 1960-1962.

TM: Rafī' al-Dīn Ibrāhīm Širāzī, *Taḍkirat al-Mulūk*. Ms. Hist. no. 142, Salar Jung Museum, Hyderabad.

TSh: Dawlat Šāh al-Samarqandī, *Taḍkirat al-Šu'arā'*. E. G. Browne (ed.), London & Leiden, 1901.

TSS: 'Abbās Ḥān Sarwānī, *Tārīḥ-i Šīr Šāhī*. S. M. Imam al-Dīn (ed.), Dacca, 1964.

二次資料

Abdul Aziz (1967) *The Imperial Library of the Mughuls*, Lahore, (Repr. Lahore: 2002).

Abdul Muqtadir, M. (1921) *Catalogue of the Arabic and Persian Manuscripts in the Khuda*

Bakhsh Oriental Public Library, volume VII, Indian History, Patna.

- Alam, M. & Subrahmanyam, S. (2004) *The Making of a Munshi, Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East*, 24(2), pp. 61-72.
- Alam, M. & Subrahmanyam, S. (2011) *The Making of A Munshi*. In: S. Pollock (ed.), *Forms of Knowledge in Early Modern Asia: Explorations in the Intellectual History of India and Tibet, 1500-1800*, Durham, pp. 185-209.
- Alam, M. & Subrahmanyam, S. (2012) *Writing the Mughal World*, New York.
- Ali, M. (1980) *The Mughul Court Ceremonies, Journal of the Pakistan Historical Society*, 28(1), pp. 42-62.
- Ansari, S. M. Razaullah (2015) *Survey of Zijes Written in the Subcontinent, Indian Journal of History of Science*, 50, pp. 575-601.
- Bahari, Ebadollah (1996) *Bihzad, Master of Persian Painting*, London & New York.
- Bailey, G. A. (1998) *The Jesuit and the Grand Mogul: Renaissance Art at the Imperial Court of India, 1580-1630*, Washington, DC.
- Beach, M. C. (1976) *A European Source for Early Mughal Painting, Oriental Art. N.S.*, 22(2), pp. 180-188.
- Beach, M. C. (1978) *The Grand Mogul: Imperial Painting in India, 1600-1660*, Williamstown, Mass.
- Beach, M. C. (1987) *Early Mughal Painting*, New York & London.
- Beach, M. C. (2012) *The Imperial Image: Paintings for the Mughal Court. Revised and Expanded Edition*, Washington, DC. & Ahmedabad.
- Beach, M. C. & Koch, E. (eds.) (1997) *King of the World: The Padshahnama, an Imperial Mughal Manuscript from the Royal Library, Windsor Castle*, London.
- Blochet, E. (1928) *Catalogue de manuscrits persans de la Bibliothèque Nationale. Tome troisième: Nos 1161-2017*, Paris.
- Bosworth, C. E. (EI2) Kay Kā'ūs b. Iskandar, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_4056).
- Brand, M. (2011) Miskin. In: M. C. Beach & E. Fischer (eds.), *Masters of Indian Painting, I: 1100-1650*, [Zürich] , pp. 167-186.
- Brend, B. & Morton, A. H. (2010) *Muhammad Juki's Shahnamah of Firdausi*, London.
- Brockelmann, C. (EI2) Kalila wa Dimna, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*. Brill, 1997.
- Browne, E. G. (1902-1906) *A Literary History of Persia*, 4 vols., London (Reprint: Surrey, 1999).
- Bruijn, J. T. P. de (EI2) Sanā'ī, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_6594).
- Bruijn, J. T. P. de (EI2) Sanā'ī, *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<https://iranicaonline>).

- org/articles/sanai-poet).
- Bruijn, J. T. P. de (EI2) Ḥadiqat al-Ḥaqīqa wa Šari'at al-Ṭariqa, *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<https://iranicaonline.org/articles/hadiqat-al-haqiqa-wasariat-al-tariqa>).
- Camps, A. (1957) *Jerome Xavier S. J. and the Muslims of the Mogul Empire: Controversial Works and Missionary Activity*, Beckenried.
- Canby, S. (2011) 'Abd al-Samad. In: M. C. Beach & E. Fischer (eds.), *Masters of Indian Painting, I: 1100-1650*, [Zürich] , pp. 97-110.
- Carvalho, P. M. (2012) *Mir'at al-Quds (Mirror of Holiness): A Life of Christ for Emperor Akbar*, Leiden / Boston.
- Chandra, P. (1976) *The Ṭūṭī-Nāma of the Cleveland Museum of Art and the Origins of Mughal Painting*, Graz.
- Chelkowski, P. (EI2) Niẓāmī Gandjawi, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_5948).
- Correia-Afonso, J. (1980) *Letters from the Mughal Court*, Bombay & Anand.
- Daiber H. & Ragep, F. J. (EI2) al-Ṭūsī, Našīr al-Dīn, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_COM_1264).
- Das, A. K. (1987) An Introductory Note on the Emperor Akbar's Ramayana and Its Miniatures. In: R. Skelton et al. (eds.), *Facets of Indian Art*, New Delhi, pp. 94-104.
- Das, A. K. (2004) Notes on Four Illustrations of the Birla Razmnama and Their Counterparts in Other Razmnama Manuscripts. In: R. Crill et al. (eds.), *Arts of Mughal India: Studies in Honour of Robert Skelton*, Ahmedabad, pp. 67-79.
- Davis, R. (EI2) Sa'dī, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_6416).
- Eftekhār, F. & Lahouti, H. (EIs) 'Abd al-Samad Shirāzī, *Encyclopaedia Islamica*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1875-9831_isla_COM_0022).
- Ethé, H. (1903-1937) *Catalogue of Persian Manuscripts in the India Office Library*, 2 vols., Oxford.
- Ettinghausen, R. (EI2) Bihzād. *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_1408).
- Farhad, M. & Brown, K. (EIs) Bihzād, Kamāl al-Dīn. *Encyclopaedia Islamica*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1875-9831_isla_COM_000000129).
- Flores, J. (2016) *The Mughal Padshah: A Jesuit Treatise on Emperor Jahangir's Court and Household*, Leiden.
- Franke, H. (2014) Emperors of Šūrat and Ma'nī: Jahangir and Shah Jahan as Temporal and Spiritual Rulers, *Muqarnas*, 31, pp. 123-149.

- Feuillebois, E. (EI3) Abū l-Qāsim, and the Shāhnāma, *Encyclopaedia of Islam, Three*, Brill Online. (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_ei3_COM_27139).
- Ghori, S. A. K. (1985) Development of Zij Literature in India, *Indian Journal of History of Science*, 20, pp. 21-48.
- Gross, J. & Urunbaev, A. (2002) *The Letters of Khwāja 'Ubayd Allāh Aḥrār and His Associates*, Leiden.
- Grube, E. J. (ed.) (1991), *A Mirror for Princes from India: Illustrated Versions of the Kalilah wa Dimnah, Anvar-i Suhayli, Iyar-i Danish, and Humayun Nameh*, Bombay.
- Gunther, A. (EI3) Badā'ūnī. *Encyclopaedia of Islam, Three*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/2451-9537_cmrii_COM_26757).
- Habib, I. (1969) The Family of Nur Jahan during Jahangir's Reign, *Medieval India, A Miscellany*, 1, pp. 74-95.
- Hodivala, S. S. (1923) *Historical Studies in Mughal Numismatics*, Calcutta.
- Hossain, S. & Ray, D. (eds.) (2017) *Celebrating Abdur Rahim Khan-i-Khanan: Statesman, Courtier, Soldier, Poet, Linguist, Humanitarian Patron*, Ahmedabad.
- Huart, C. & Massé, H. (EI2) Firdawsī, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online. (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_2376).
- Husain, M. H. (1926) The Auto-Bibliography of Mawlānā `Abd al-Ḥaqq ad-Dehlavī, *Journal of the Asiatic Society of Bengal, New Series*, 22, pp. 43-60.
- Ivanow, W. (1924) *Concise Descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts in the Collection of the Asiatic Society of Bengal*, Calcutta.
- Kennedy, E. S. (1956) A Survey of Islamic Astronomical Tables, *Transactions of the American Philosophical Society*, 46, pp.123-177.
- Khuda Bakhsh Oriental Public Library (n.d.) *Timur Nama*. Patna.
- Kinra, R. (2015) *Writing Self, Writing Empire: Chandar Bhan Brahman and the Cultural World of the Indo-Persian State Secretary*, Oakland.
- Knobel, E. B. (1917) *Ulugh Beg's Catalogue of Stars: Revised from all Persian Manuscripts Existing in Great Britain, with a Vocabulary of Persian and Arabic Words*, Washington.
- Koch, E. (2018) Jahangir as Publius Scipio Maior: The Commensurability of Mughal Political Portraiture. In: C. Branfoot (ed.), *Portraiture in South Asia since the Mughals: Art, Representation and History*, London, pp. 73-97.
- Lefèvre, C. (EI3) Dīn-i Ilāhī, *Encyclopaedia of Islam, Three*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_ei3_COM_26038).
- Losty, J. (2013) The Carpet at the Window: A European Motif in the Mughal Jharokha Portrait. In: M. Sharma & P. Kaimal (eds.), *Indian Painting: Themes, History and*

- Interpretations. Essays in Honour of B. N. Goswamy*, Ahmedabad, pp. 52-64.
- MacLagan, E. (1932) *The Jesuits and the Great Mogul*, London.
- Majumdar, R. (1998) The Kathakautuka: A Persian Love Poem in Sanskrit Garb, *Journal of the Oriental Institute*, 47(3/4), pp. 283-287.
- Marek, J. & Knížková, H. (tr. O. Kuthanová) (1963) *The Jenghiz Khan Miniatures from the Court of Akbar the Great*, London.
- Marlow, L. (EI3) Kay Kā'ūs b. Iskandar, *Encyclopaedia of Islam*, Three, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_ei3_COM_33095).
- Mashita, H. (2001) The Discrepancy of Chronology of Ṭabaqāt-i Akbari: An Introduction to a Survey of Manuscripts, *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University*, 35, pp. 39-71.
- Meredith-Owens, G. M. (EI2) Awḥadī, *Encyclopaedia of Islam*, Second Edition, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_0874).
- Natif, M. (2008) The SOAS *Anvār-i Suhaylī*: The Journey of a “Reincarnated” Manuscript, *Muqarnas*, 25, pp. 331-358.
- Ninomiyā, A. (2006) Analyzing Sufism in 16th-century India: The Case of Bada'uni's *Najāt al-Rashid*, *Proceedings: Indian History Congress, 65th Session*, pp. 345-349.
- Ogura, S. (2010/2011) Transmission Lines of Historical Information on Kaśmīr: From *Rājataranginī* to the Persian Chronicles in the Early Muḡal Period, *Journal of Indological Studies*, 22/23, pp. 23-59.
- Okada, A. (2011) Keshav Das. In: M. C. Beach & E. Fischer (eds.), *Masters of Indian Painting, I: 1100-1650*, [Zürich], pp. 153-166.
- Omidšalar, M. (EIr) Kalīla wa Demna ii. The Translation by Abu'l Ma'ālī Naṣr-Allāh Monšī, *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<https://iranicaonline.org/articles/kalila-demna-ii>).
- Parodi, L. E. (2018) Tracing the Rise of Mughal Portraiture: The Kabul Corpus, c. 1545-55. In: C. Branfoot (ed.), *Portraiture in South Asia since the Mughals: Art, Representation and History*, London, pp. 49-71.
- Paul, J., 'Alī b. Ḥusayn al-Wā'iẓ al-Kāshifī, *Encyclopaedia of Islam*, Three, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_ei3_COM_22676).
- Piemontese, A. M. (1989) *Catalogo dei manoscritti persiani conservati nelle biblioteche d'Italia*, Roma.
- Platts, J. T. (1884) *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī and English*, Oxford.
- Reinert, B. (EI2) Khāḡānī, *Encyclopaedia of Islam*, Second Edition, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_4135).
- Richard, F. (1989) *Catalogue des manuscrits persans, I: Ancien fonds*, Paris.

- Richard, F. (2013) *Catalogue des manuscrits persans, Bibliothèque nationale de France, Département des manuscrits. Tome II: Supplément persan. Première partie, 1-524; Deuxième partie, 525-1000*, Roma.
- Riedel, D. (Elr) Kalila wa Demna i. Redactions and Circulation, *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<https://iranicaonline.org/articles/kalila-demna-i>).
- Rieu, C. (1879-1883) *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, 3 vols., London.
- Rizvi, S. A. A. (1975) *Religious and Intellectual History of the Muslims in Akbar's Reign*, New Delhi.
- Rizvi, S. (1983) Tarikh-i-Alfi. In: M. Hasan (ed.), *Historians of Medieval India*, Meerut, pp. 119-128.
- Rosen, V. (1886) *Collections scientifiques de l'Institut des langues orientales du ministère des affaires étrangères. III. Les manuscrits persans de l'Institut des langues orientales*, Saint-Pétersbourg.
- Losty, J. P. & Roy, M. (2012) *Mughal India: Art, Culture and Empire*, London.
- Sarma, S. R. (2008) *The Archaic and the Exotic: Studies in the History of Indian Astronomical Instruments*, New Delhi.
- Sarma, S. R. & Zamani, M. (2019) On the Persian Translation of Bhāskara's *Līlāvati* by Abu'l Faiz Faizī at the Court of Akbar, *Indian Journal of History of Science*, 54(3), pp. 269-285.
- Sédillot, M. L. P. E. A. (1847-1853) *Prolégomènes des tables astronomiques d'Oloug-Beg*, 2 vols., Paris.
- Seyller, J. (1986) The School of Oriental and African Studies *Anvar-i Suhayli*: The Illustration of a *De Luxe* Mughal Manuscript, *Ars Orientalis*, 16, pp. 119-151.
- Seyller, J. (1997) The Inspection and Valuation of Manuscripts in the Imperial Mughal Library, *Artibus Asiae*, 57(3/4), pp. 243-349.
- Seyller, J. (1999) *Workshop and Patron in Mughal India: The Freer Rāmāyaṇa and Other Illustrated Manuscripts of 'Abd al-Raḥīm*, Zürich.
- Seyller, J. (2002) *The Adventures of Hamza*, Washington, DC.
- Seyller, J. (2011a) Basawan. In: M. C. Beach & E Fischer (eds.), *Masters of Indian painting, I: 1100-1650*, [Zürich] , pp. 119-134.
- Seyller, J. (2011b) Manohar. In: M. C. Beach & E. Fischer (eds.), *Masters of Indian Painting, I: 1100-1650*, [Zürich] , pp. 135-152.
- Sharma, S. (2016) The Production of Mughal Shahnamas: Imperial, Sub-imperial, and Provincial Manuscripts. In: S. Sharma & B. Waghmar (eds.), *Firdawsii Millennium Indicum: Proceedings of the Shahnama Millenary Seminar*, The K R Cama Oriental

- Institute, Mumbai, 8-9 January, 2011, Mumbai, pp. 122-134.*
- Slaje, W. (2014) *Kingship in Kaśmir (AD 1148-1459): From the Pen of Jonarāja, Court Paṇḍit to Sulṭān Zayn al-‘Ābidīn*, Halle.
- Soucek, P. P. (1987) Persian Artists in Mughal India: Influences and Transformations. *Muqarnas*, 4, pp. 166-181.
- Storey, C. A. (1927-1939) *Persian Literature: A Bio-bibliographical Survey. Volume I: Qur’ānic Literature; History and Biography, Part 1: Qur’ānic Literature; History*, London.
- Subtelny, M. E. (Elr) Kāṣefī, Kamāl-al-Dīn Ḥosayn Wā‘eẓ, *Encyclopaedia Iranica*, online edition (https://iranicaonline.org/articles/kasefi_kamal).
- Sufi, G. M. D. (1941) *Al-Minhaj, Being the Evolution of Curriculum in the Muslim Educational Institutions of India*, Lahore (Reprint: Delhi, 1977).
- Syed, M. A. (2012) How Could Urdu Be the Envy of Persian (Rashk-i-Fārsi): The Role of Persian in South Asian Culture and Literature. In: B. Spooner & W. L. Hanaway (eds.), *Literacy in the Persianate World: Writing and the Social Order*, Philadelphia, pp. 279-310.
- Truschke, A. (2016) *Culture of Encounters: Sanskrit at the Mughal Court*, New York.
- UNESCO (Akbar): Tarikh-E-Khandan-E-Timuriyah. Akbar shooting deer. (<https://en.unesco.org/mediabank/25034/>)
- UNESCO (Shah Jahan): Tarikh-E-Khandan-E-Timuriyah. Shah Jahan, the Mughal Emperor and grandson of Akbar, testifies the authenticity of the manuscript in his own writing. (<https://en.unesco.org/mediabank/25029/>)
- Verma, S. P. (1994) *Mughal Painters and Their Work: A Biographical Survey and Comprehensive Catalogue*, Delhi.
- Verma, S. P. (2005) *Painting the Mughal Experience*, New Delhi.
- Watt, W. M. (EI2) al-Ghazālī, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_COM_0233).
- Wickens, G. M. (Elr) Akḷāq-i Nāserī, *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/aklaq-e-naseri>).
- Wickens, G. M. (Elr) Anwār-e Sohaylī, *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<https://iranicaonline.org/articles/anwar-e-sohayli>).
- Yousofi, G. H. (EI2) Kāshifī, Kamāl al-Dīn Ḥusayn b. ‘Alī, *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill, 1997.
- 大塚修 (2016) 「『集史』の伝承と受容の歴史：モンゴル史から世界史へ」『東洋史研究』75 (2) , pp. 312-347.
- 小倉智史 (2010) 「カシミールのペルシア語年代記におけるスーフィー伝：在地有力者との関係を中心に」『イスラム世界』74, pp. 33-65.

- 小倉智史 (2018)「まだ見ぬ等価を求めて ムハンマド・シャーハーバーディーの翻訳
ストラテジー」『イスラム世界』90, pp. 29-60.
- 白岩一彦 (2000)「ラシード・ウッディーン『歴史集成』現存写本目録」『参考書誌研究』
53, pp. 1-33.
- 二宮文子 (2011)「ムガル朝の知識人アブドゥルカーディル・バダーユニーの経歴と
その評価」小林春夫、阿久津正幸、仁子寿晴、野元晋 (編)『イスラームにお
ける知の構造と変容』早稲田大学イスラーム地域研究機構, pp. 147-156.
- 真下裕之 (2012)「ムガル帝国におけるバフシ職について：大バフシ職の運用における
人的要因」『東洋史研究』71 (3), pp. 85-130.
- 真下裕之 (2014)「ムガル朝インドの写本と絵画」小杉泰・林佳世子編『イスラーム 書
物の歴史』名古屋大学出版会, pp. 279-297.
- 真下裕之 (2017)「クトゥブ・シャーヒー朝の起源に関する諸説とその周辺：インド洋
西部海域における人的移動の諸相」『西南アジア研究』86, pp. 112-135.
- 真下裕之 (2020)「帝国のなかの福音：ムガル帝国におけるペルシア語キリスト教典籍
とその周辺」齋藤晃編『宣教と適応：グローバル・ミッションの近世』名古屋
大学出版会, pp. 236-283.
- 間野英二 (2001)『バーブルとその時代 バーブル・ナーマの研究 4 研究篇』松香堂.